慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	NIEにおける学習ツールの構築 : 石巻での地域NIE ワークショップに向けて
Sub Title	Building a learning tool in the NIE : for a workshop in Ishinomaki as regional NIE activities
Author	井村, 隼人(Imura, Hayato) 岸, 博幸(Kishi, Hiroyuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科
Publication year	2013
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2013年度メディアデザイン学 第294号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40001001-00002013-0294

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修士論文 2013年度(平成25年度)

NIEにおける学習ツールの構築

-石巻での地域NIEワークショップに向けて-

慶應義塾大学大学院
メディアデザイン研究科

井村 隼人

本論文は慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科に

修士 (メディアデザイン学) 授与の要件として提出した修士論文である。

井村　隼人

審査委員:

岸 博幸 教授 (主査)

加藤 朗 教授 (副査)

古川 享 教授 (副査)

修士論文 2013 年度(平成 25 年度)

NIE における学習ツールの構築
-石巻での地域 NIE ワークショップに向けて-

カテゴリー: アクションリサーチ

論文要旨

本論文は、WEB 上に学習ツールの開発を行い、地域の NIE 活動の促進を図る活動をとりまとめたものである。NIE 活動とは Newspaper In Education の略であり、学校教育に新聞を教材として利用することを言う。本論文では、まず、学校内で行われている NIE 活動を分析し、地域で行われている NIE 活動の実態に照らし合わせた。その結果、活動に参加するこどもの学校や学年の違いが要因となるこどものコミュニケーションの問題、学校外で行う事による活動時間の問題、参加が自由である事によるこどもの出席の問題の 3 点が課題であることが分かった。この課題を解決するため、宮城県石巻地域におけるワークショップにおいて、ワークショップの効果を高めるための学習ツールの開発を行い、実際のワークショップで使用することによって、その評価を行った。学習ツールは小学生には操作が難しいことが分かったため、ワークショップの講師とこどもが一緒に操作することによって学習ツールを活用することができた。学習ツールが講師とこどもたちとのコミュニケーションを活発にするために有効であることが分かった。また、地域の NIE にとっての学習ツールの品質向上だけではなく、学習ツールを活用できる場所の構築こそがポイントである事も分かった。その一例として、学校内の NIE 活動と地域の NIE 活動を関連付けることにより、これらの発展させる事ができるのではないかと考えられる。

キーワード:
NIE, 新聞, ワークショップ, 教育, 子ども

慶應義塾大学大学院 メディアデザイン研究科
井村 隼人

Abstract of Master's Thesis of Academic Year 2013

Building a Learning Tool in the NIE -For a Workshop in Ishinomaki as Regional NIE Activities-

Category: Action Research

Summary

This thesis describes a theory to promote regional NIE activities, based on development of learning tools on the WEB. NIE is an abbreviation of "Newspaper In Education" and, newspapers are used as live teaching material in classrooms. This thesis in the first step analyzes the NIE activities being held in a school, and it was in light of the actual situation of NIE activities being carried out in the region. As a result, 3 issues were highlighted, communication problems of children, activity a matter of time, and the problem of attendance of children. A learning tool for enhancing the effect of the workshop, to solve these issues, in the workshop in Miyagi Ishinomaki area, was developed and evaluated in the workshop. While the operation of the tool by the elementary school students was difficult, and it was possible to take advantage of learning tools when children and instructors manipulate it together in the workshop. The learning tool promoted communications among children and instructors. In addition, this thesis as well as states that improving the quality of learning tool for the NIE in the region, establishment of the venues where NIE activities are held is important where the learning tool can take advantage. It is expected to promote NIE activities by associating the NIE activities in the school and the regional NIE activities.

Keywords:

NIE, Newspaper, Workshop, Education, Children

Graduate School of Media Design, Keio University

Hayato Imura

目　　次

第 1 章 序論 1
1.1. 問題定義 2
1.2. 本論文の位置付け 4

第 2 章 先行研究からの現状分析と仮説 5
2.1. NIE についての現状分析と先行研究 5
2.1.1 NIE 活動の実態 5
2.1.2 NIE 活動の教育への効果 6
2.1.3 NIE 活動の分析 11
2.2. 地域の NIE 活動の事例からの考察 13
2.2.1 一般社団法人キッズメディアステーションについて 13
2.2.2 地域の NIE についての考察 15
2.3. 学校内の NIE 活動を地域の NIE 活動について 16
2.4. 仮説の構築 16
2.5. 反転授業について 17
2.6. 学習ツール 19

第 3 章 学習ツールの実装 20
3.1. 問題解決事項と要求要件の考察 20
3.2. 仮説からの学習ツールのプロトタイプの構築 22
3.2.1 学習ツールの概要 22
3.2.2 学習ツール I　編集会議所と記事投稿ページ 24
3.2.3 学習ツール II　ワークショップ補助情報 27
3.3. プロトタイプの評価 30
3.4. 学習ツールの改善するべき点 31
3.5. 実施検討 32

第 4 章 実施内容 33
4.1. ツールの概要 33

4.1.1 ツールⅠについて 34
4.1.2 ツールⅡについて 37
4.2. ツールⅠの実験 37
4.2.1 実験の目的 37
4.2.2 ワークショップの概要と実験方法 37
4.2.3 ワークショップの詳細 38
4.3 ツールⅡの実験 44
4.3.1 実験の目的 44
4.3.2 ワークショップの概要と実験方法 44
4.3.3 ワークショップの詳細 45

第 5 章 実験結果と考察 46
5.1. ツールⅠの実験の結果 46
5.1.1 講師からのインタビュー 46
5.1.2 こどもたちからのインタビュー 49
5.2. ツールⅡの実験の結果 51
5.3. 結果からの考察 53
5.4. 本論文の全体を通した考察 54

第 6 章 結論 57
6.1. 地域と NIE の今後について 57
6.2. NIE における学習ツールの今後について 57
6.3. 学校教育における情報リテラシー 58

謝辞 61
参考文献 62
付録 64
A. ワークショップ進行表 64
B. 12 月 1 日 シンポジウムチラシ 66
C. 石巻日日こども新聞を読んだ感想Ⅰ 67
D. 石巻日日こども新聞を読んだ感想Ⅱ 68
E. 石巻日日こども新聞の関連報道 69

F. 反転授業の導入例 70

図　目　次

3.1 学習ツール:TOP ページ 23
3.2 プロトタイプⅠ:編集会議所 25
3.3 プロトタイプⅠ:記事投稿ページ 25
3.4 プロトタイプⅠ:投稿された記事のサンプル 26
3.5 プロトタイプⅡ:ワークショップ補助情報ページ 28
3.6 プロトタイプⅡ:音源再生のページ 29
3.7 プロトタイプⅡ:動画再生のページ 29

4.1 ツールⅠ:石巻ニューゼのページ 35
4.2 ツールⅠ:壁新聞のページ 36
4.3 ツールⅡ:法音寺のページ 38
4.4 ツールⅡ:つづきジュニア編集局のページ 39
4.5 ワークショップ会場の様子 43
4.6 ツールⅡの操作をするこどもたち 45

表　目　次

2.1 2013 年度 NIE 実践指定校数 5
2.2 NIE 活動を通して児童・生徒が好きになったこと　小学生① 6
2.3 NIE 活動を通して児童・生徒が好きになったこと　小学生② 6
2.4 NIE 活動を通して児童・生徒が好きになったこと　中学生・高校生① .. 7
2.5 NIE 活動を通して児童・生徒が好きになったこと　中学生・高校生② .. 7
2.6 教師から見た NIE 活動後の児童・生徒の変化の様子 8
2.7 NIE 活動を執り行っている学校の教師の新聞閲読時間 9
2.8 NIE 活動による配布された新聞で学校教師がよく読むようになった記事 9
2.9 学校での半年間での NIE 実践授業時間 10
2.10 NIE 活動における教師の新聞活用の調査 難しさ　母数=437 10
2.11 NIE 活動における教師の新聞活用の調査 期待　母数=437 11

第１章

序　論

本論文は、地域における NIE 活動の促進のための学習ツールとそれに適したワークショップにおける環境の構築を目指したアクションリサーチである。

NIE は Newspaper In Education の略称であり、教育に新聞を取り入れ学校等で教材として使用する学習の事を言う。アメリカで 1930 年にニューヨークタイムズ[1]が新聞を教材として高校での導入を考え始めたのが最初であり、NIE を教育上利用している国は 52 カ国に達している。日本で公式に認知されたのは、1985 年の新聞大会[2]の席上である。日本での取り組みは新聞業界主導で始まったが、教育界との連携は不可欠であり二人三脚でのスタートとなった。

その後、1989 年東京都内の小学校 1 校と中学校 2 校で実験的パイロット計画がスタートする。中々広がらない活動であったが、1998 年に転機が訪れる。学習指導要領の改訂である。学校に「総合的な学習の時間」が導入されるのに伴って、新聞を活用する学習は追い風を受ける形で勢いをつけた。そして、NIE 促進を目指すため、新聞協会は 2000 年 10 月に日本新聞教育文化財団[3]に NIE 部を発足させた。この NIE 部には、新聞業界側の人間だけではなく教育界側の都道府県教育委員会などの参加もあり、この年から本格的な NIE 促進が始まり、新聞業界が本格的に教育界に参入してきたともいえる。日本でとりわけ新聞教育というと日本新聞協会[4]が中心となって行っている NIE 活動を指す場合がほとんどであるのはこの影響である。

この NIE 活動の目的としては、こどもに新聞閲読の習慣をつけさせることである。新聞閲読の習慣をつけることにより、こどもの目を社会に向けさせる事、活動を通して新聞を読める人を育てる事、新聞の役割や機能を理解してもらう事などを狙った活動である。また、NIE 活動を実地している学校からは、授業の活性化やこどもの学習能力向上に期待する声もある。

主に日本新聞協会が学校での実地を行ってきた NIE 活動であるが、近年、特に 3.11 東日本大震災を境に、学校外での NIE 活動やそれに準ずる活動がクローズアップされている。それは、「地域 NIE」と分類することが出来き、2009 年に日本新聞協会所属で教育コンサルの渡辺裕子氏が宮城県での新聞学習の活動

において同氏が名づけたのが言葉の由来である。この活動は、学校の授業として開催されるのではなく、主にこども向けのワークショップでの形式を取っており、ボランティアや NPO 法人や地方紙や大学の協力で開催される場合が多い。従って、ここで記されている「地域」とは、地方紙や大学などの NIE 活動を開催する団体がその地元の範囲に影響を及ぼせる程度の範囲を表す。NIE 活動と地域における NIE 活動の目的は共に同じであり、こどもたちに新聞や新聞に関連することを教材として使うことを通して、地域の事や社会の動き等を理解してもらうことである。本論文では、地域における NIE の活動に注目し、それらの発展と促進を学習ツールの制作とワークショップの構築を通して提案し、宮城県石巻地方のこども向けワークショップでの実践を通して実証を行う。

1.1 問題の所存

本論文は、実際に宮城県石巻市の地域における NIE 要素を含む活動を行っている団体、一般社団法人キッズメディアステーションと石巻地域の新聞を発行している石巻日日新聞社の協力の基、研究を執り行った。本論文は 3.11 東日本大震災で甚大な被害を受けた地域での取り組みに注目することにこだわった。理由は、石巻地域の震災復興を将来進めていくのは、その地域に生まれ育ったこどもたちだからである。震災地のこどもたちが参加する取組みを応援することを通して、新たな新聞の役割や新聞活用を通した目指すべき復興活動の将来像を示すことが出来るかもしれないと考えたからである。震災地や復興地などの課題を抱える場所での取り組みを行うことを通して、本論文が復興活動の一部となるように取り組んでいきたい次第である。

本論文は次の地域の NIE における課題解決を行う。

Ⅰこどものコミュニケーションの問題
Ⅱ活動時間の問題
Ⅲこどもの出席の問題（継続性）

これらについて以下に概要を説明しておく

①こどものコミュニケーションの問題

地域の NIE 活動は、学校内で行われている NIE 活動とは違い、学校や学年やクラスが同じであることは少なく、異なる学校のこどもたちが集まることが多いためにこども達の意思疎通が難しい場合が考えられる。

②活動時間の問題

こどもたちは普段学校に通っており、活動時間は限定的なものとなる。実際にキッズメディアステーションが石巻で行っているワークショップは毎週土曜日 2 時間の開催である。

③こどもの出席の問題（継続性）

学校内での NIE 活動とは違い、参加の有無はこどもたちの自由である。無論強制に参加させることはできない。従って、参加してもらう工夫や、一回だけ休んでしまった時の対応などの創意工夫が必要となってくる。

地域の NIE の大きな特徴としては、発起人が学校の先生に限らず、学校の学習指導要領に縛られないため、融通の利いた幅の広いワークショップの開催が可能であること、また、地域の人や団体の参加ができるため、他地域との交流や地元企業や地元の人を比較的簡単に参加を促すことと考えられる。

これらをまとめると以下のようになる

・活動の発起人が学校の先生に限らない事
・学校の学習指導要領に縛られない活動が出来る事
・地域の人や団体の参加が出来る事

研究の指針

本論文は地域の NIE の特徴を活かすことで課題解決を行っていく。具体的には実際に行われている地域の NIE 活動に学習ツールの制作を通してアプローチを行う。そして、地域における NIE 活動の問題点の解決の方法を考察し、今後の地域の NIE の目指すべき方向を提案する。最後に NIE 活動全体の将来像を述べる。

1.2 本論文の位置付け

本節では、本論文の位置付けを述べる。本論文は、新聞紙の活用が一般的だった NIE 活動にデジタルでのアプローチを行う事によって、NIE 活動の促進を図る研究である。促進とは、デジタルツールの使用することで、今まで解決が難しかった課題を解決することである。また、今後の NIE 活動とデジタルツールの可能性を本論文で見つけ、今後の NIE 活動のあるべき姿を探ることも本論文の達成すべき目標の一つとする。従って、本論文はデジタルツールでの NIE 活動の問題解決と、その問題解決時に得られた研究データを基に、これからの理想の NIE とデジタルツールの将来像や可能性を示す。章立てとして、第 2 章では、地域の NIE の現状分析と先行研究を分析し仮説を述べる。第 3 章では、第 2 章での仮説に基づき、地域 NIE 発展のための学習ツール等の制作と現場での評価を通じ改善を試みる。そして、その改善された学習ツールとそれに基づいた学習ツールを構築する。第 4 章では、3 章で構築した学習ツールをワークショップにて実装実験を行う。第 5 章では、第 4 章でのデータに基づき実験の結果を述べる。第 6 章では、今後のデジタルツールと NIE 活動の展望や在り方を結論として述べる。

---

[1] アメリカ合衆国の新聞社　http://www.nytimes.com/
[2] 全国の新聞社が加盟する日本新聞協会(http://www.pressnet.or.jp/)が行っている大会の事
[3] 日本新聞協会が NIE 促進のために立ち上げた財団で日本新聞博物館(http://newspark.jp/newspark/)や NIE 事業を運営する
[4] http://www.pressnet.or.jp/

第 2 章

先　行　研　究　か　ら　の　現　状　分　析　と　仮　説

2.1. NIE についての現状分析と先行研究

本節では、主に学内で行われている NIE 活動についての現状と実態を述べ、それに伴った活動報告を述べる。

2.1.1　NIE 活動の実態

現在、日本新聞教会に NIE 実践指定校に認定され、新聞協会のバックアップのもと、NIE 活動の実践を行っている学校は全国 571 校である(2013 年調べ)。内訳は表 2.1 に示す。

表 2.1:2013 年度 NIE 実践指定校数

小学校	小中連携校	中学校	中高連携校	高校	特別支援校	高専	総計
231	7	209	7	110	5	2	571

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

NIE 実践指定校とは

新聞協会が NIE 活動普及のために行っている認定の事を言う。学校がこの認定を受けると、認定された学校がある地域の NIE 推進組織加盟社の発行する新聞が NIE 活動の利用のために学校側に一定期間無料で配達される。新聞は 2 年間の間に NIE を実践する教師が２人以下の場合１銘柄につき１部を延べ２か月、３人以上の場合１銘柄につき１部を延べ４か月配布される。

NIE の授業例

NIE の授業の一例を述べる。基本的には下記３つの学習のどれかに当てはまる。

・新聞の読み比べ

主に同じニュースの新聞での報道のされ方の違いを考察するところから学習に入る学習スタイル

・新聞の作成
学級新聞や学年新聞などの制作を通じて文章の書き方や見出しのつけ方などを行い新聞の役割について学ぶ学習スタイル

・記事をスタートの題材としての社会問題等の考察
事前に家庭等で興味のある記事や教師が用意した記事を基に社会問題等の議論を重ねる学習スタイル。

2.1.2NIE 活動の教育への効果

次に、2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告[1]を基に NIE 活動の教育への効果を抜粋して分析する。

表 2.2,表 2.3,表 2.4,表 2.5 は NIE 活動を通して小学生、中学生、高校生にとって、どのような関心や興味の変化が起こったかを示すデータである。小学生、中学生、高校生共に文章を扱う事や調べる事や人の意見を聞く事などによって関心が強くなる傾向がみられている。表 2.6 から教師から見ても文章に触れる事や調べる事といった能力の向上が見られることがわかる。

表 2.2:NIE 活動を通して児童・生徒が好きになったこと　小学生①

	母数	文章を読む	文章を書く	漢字を覚える	数字を読みとる
小学生男子	903	49.6%	18.4%	33.6%	20.5%
小学生女子	846	59.0%	29.8%	31.8%	10.2%

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

表 2.3:NIE 活動を通して児童・生徒が好きになったこと　小学生②

	母数	考えを発表する	意見を聞く	調べて知る	その他
小学生男子	903	23.5%	27.8%	48.5%	2.3%
小学生女子	846	18.4%	28.5%	49.5%	2.8%

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

表 2.4:NIE 活動を通して児童・生徒が好きになったこと　中学生・高校生①

	母数	文章の内容を理解する	考えを文章にまとめる	考えを発表する	意見を聞く
中学生男子	817	42.7%	18.0%	14.3%	30.7%
中学生女子	815	41.0%	17.5%	9.0%	33.4%
高校生男子	577	47.7%	22.4%	13.2%	31.0%
高校生女子	738	47.8%	20.3%	8.7%	38.2%

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

表 2.5:NIE 活動を通して児童・生徒が好きになったこと　中学生・高校生②

	母数	数字やデータを読み取る	使える言葉が増えた	調べて知る	その他
中学生男子	817	21.9%	19.3%	29.3%	2.3%
中学生女子	815	12.3%	26.3%	27.9%	2.3%
高校生男子	577	16.1%	23.4%	25.5%	3.6%
高校生女子	738	11.2%	20.7%	26.2%	2.3%

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

表 2.6:教師から見た NIE 活動後の児童・生徒の変化の様子

	顕著に みられる	見られる	ほとんど 見られない	全く 見られない	無回答
新聞を進んで読む	8.9%	65.7%	18.5%	0.9%	5.9%
読む、書くことが増えた	4.3%	57.9%	30.2%	1.4%	6.2%
生き生きと学習する	8.5%	51.7%	30.9%	2.1%	6.9%
自分で調べる態度が身につく	8.2%	60.2%	23.3%	1.6%	6.6%
記事について友人・家族と話す	10.5%	60.9%	20.8%	1.4%	6.4%
新聞についての質問が増えた	8.9%	43.5%	37.5%	4.1%	5.9%
興味を示さない	0.9%	14.6%	59.7%	16.5%	8.2%

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

表 2.7,表 2.8 は NIE 活動を執り行っている学校教師の意識調査である。教師の新聞の閲覧時間は減っているものの、学校に新聞を配布されることによって、社会や教育・学校について関心を持ち新聞を読んでいる教師がいることがわかる。また、表 2.9 は半年間の NIE 実践授業時間を表した表である。半年間で半数以上の学校が 10 時間未満、8 割の学校が 20 時間未満という報告となっている。一か月あたり、1-2 時間の学校がほとんどであることがわかる。

表 2.9,表 2.10 は教師から見た授業における新聞活用の難しさと期待の調査である。新聞活用によって、生徒・児童の社会への関心などの高まりを期待しつつも、自らの新聞活用の指導や扱いに困惑しているといった傾向も出ていることが言える。

表 2.7：NIE 活動を執り行っている学校の教師の新聞閲読時間

	母数	5 分未満	5 分-15 分	15 分-30 分	30 分-60 分	60 分以上
2005 年	365	2.7%	12.1%	36.4%	43.0%	5.5%
2009 年	437	5.5%	21.1%	40.3%	28.4%	4.3%

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

表 2.8: NIE 活動による配布された新聞で学校教師がよく読むようになった記事

社会	67.0%
教育・学校	53.8%
政治	51.0%
地域	46.2%
経済	29.3%
スポーツ	28.1%
事件・事故	27.0%
外国	18.8%
社説・評論	17.6%
コラム	16.9%

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

表 2.9:学校での半年間での NIE 実践授業時間

5 時間未満	36.6%
5~9 時間	25.6%
10~14 時間	15.6%
15~19 時間	8.2%
20~24 時間	4.3%
25 時間以上	4.2%
無回答	5.5%

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

表 2.10:NIE 活動における教師の新聞活用の調査 難しさ　母数=437

	1 位	2 位	3 位
教材研究の時間が足りない	28.4%	23.3%	16.9%
新聞活用の時間確保が難しい	25.9%	26.3%	10.1%
使いたい記事が見つけられない	9.4%	11.9%	10.5%
カルキュラムとの調整が難しい	16.2%	15.8%	15.1%
指導方法が分からない	1.4%	4.3%	10.3%
児童生徒にとっての新聞記事は難しい	11.7%	10.1%	16.2%
綜合的な学習の時間が削減された	0.9%	1.8%	6.2%
その他	2.1%	0.2%	2.1%

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

表 2.11:NIE 活動における教師の新聞活用の調査 期待　母数=437

	1 位	2 位	3 位
授業の活性化	8.0%	4.6%	7.8%
社会への関心が高まる事	48.5%	16.5%	10.8%
多面的なものの見方・考え方が身につく事	14.4%	30.9%	16.5%
文章の読解力・表現力が向上する事	8.7%	18.8%	19.0%
批判力・判断力が育つ事	1.8%	8.2%	11.9%
新聞に興味関心を持つ子よ	12.4%	10.1%	12.6%
友人家族との意見交換が活発になる事	0.7%	4.8%	9.6%
児童・生徒の学習意欲が高まる事	1.8%	2.3%	7.1%
新聞活用に期待しない	0.0%	0.0%	0.2%
その他	0.5%	0.0%	0.0%

出典：2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告

表 2.2 から表 2.11 までをまとめると、文章の扱いや人の意見を聞いたりする能力の向上が見られ、社会への関心の向上も見られている。一方で、教師自身の社会への関心等にも良い変化が見らており、新聞活用への期待も高い。しかし、新聞記事の難しさや授業準備等の時間の無さへの不安の声も数値で表れていると言える。

2.1.3 NIE 活動の分析

2.1.1 での NIE の実態分析のデータの基となった、「2009 年度 NIE 効果測定調査結果報告」[1]に対する考察を述べる。調査報告書の 1 ページ目に次の事が述べられていた。

> 調査結果からは、NIE の実践を通じて児童・生徒が新聞に親しみ、社会への関心をもつようになっているとともに、新聞記事について家族や友人と対話する頻度が増えるなど、コミュニケーションのきっかけとなっていることも浮き彫りになりました。一方で教師の新聞閲覧時間が減少傾向にあるほか、教材研究のための時間不足や強化における指導内容の増加により新聞活用の時間確保が難しいなど、NIE をめぐる学校現場の環境が厳しくなっている現状も改めて示されました。

この引用文を見る限りでは、学校内で新聞協会が推進しているNIE活動は新聞を児童・生徒に閲読させることを目標としているとも考察できる。また、調査報告書の評価項目数を見ると、圧倒的に新聞閲読を起点とする評価が多い。このことからも新聞閲読が目標とされている傾向があると考察できる。

2.2. 地域の NIE 活動の事例からの考察

本節では、地域の NIE 活動の事例を紹介しながら、地域の NIE の実態について述べる。地域 NIE とは、第一章で述べたとおり、2009 年に学校内で NIE 活動を進めていた、小学校や中学校に向けた NIE 活動の教育コンサルを行っている渡辺裕子氏が、中学校教員退職後に学校外の地域で行った、新聞の学習活動が始まりである。地域の NIE 活動は東日本大震災を境にして、東北を中心に普及した。例えば、全国的なこども新聞の発行やこどもの情報発信の活動である。次項では、東日本大震災後、宮城県石巻市でこどもの発信活動として活動を開始し、本論文の研究協力団体である、一般社団法人キッズメディアステーションの概要と、その活動の発行物である「石巻日日こども新聞」を地域 NIE の事例として紹介する。

2.2.1 一般社団法人キッズメディアステーション

本項では、地域 NIE の事例としてキッズメディアステーションの活動について述べる。一般社団法人キッズメディアステーションは本論文の研究協力団体である。宮城県仙台市青葉区上杉に所在し代表者、太田倫子氏が中心となり、石巻地域のこどもたちに取材活動やワークショップの機会を作り、こどもたち自らが新聞記事を書いている。これらの活動を石巻日日新聞社とトヨタ財団法人[5]の支援の中、執り行っている。組織の概要と活動概要は下記に述べる。

組織概要

法人名：一般社団法人キッズメディアステーション

活動の目的

・東日本大震災を経験したこどもたちが経験と気づきを地域の外に発信し震災の経験を生きる力に変えること

・時とともに東日本大震災の情報が減っていく中でこどもたちの視点で取材を続けることにより記憶の風化を防ぐこと

・震災と復興をテーマに地域外の読者とのコミュニケーションを図ることにより防災意識を高めること

発足：2011 年９月１１日の内閣府ふるさと起業塾震災復興ビジネスコンペ[6]にてふるさと起業家認定を受けて設立された。活動として発行している

新聞名は「石巻日日こども新聞」である。

執り行っているワークショップの概要

活動場所:宮城県石巻市にある石巻ニューゼ

活動時間:基本的に毎週土曜日 1 回 2 時間程度

活動体系: 毎号 10 回程度のワークショップで石巻日日こども新聞の完成を目指す（年 4 回号)。

石巻日日こども新聞の概要

新聞名:石巻日日こども新聞

創刊:2012 年 3 月 11 日

発行:季刊誌

部数:5 万 5 千部(第 7 号実績)

紙面内容:カラー4 ページで構成

発行形態:全国からサポーターを集め、その人たちからの寄付により新聞が発行されている。全国 150 名ほどのサポーターがいる。また、石巻日日新聞社と協力しており、新聞の印刷を行っている。出来上がった石巻日日こども新聞は、石巻日日新聞の折り込みとして石巻地域に配布されている。

石巻ニューゼについて

石巻ニューゼとは、石巻日日新聞社が宮城県石巻市で運営するニュースの博物館である。2012 年 11 月 1 日にオープンした。創設者は石巻日日新聞社の近江弘一社長氏である。館内には 6 枚の壁新聞がメインとして展示され、石巻地域の 100 年の歴史の年表や写真、地域の名産品などが取り揃えられている。

入館料は無料であり、展示品は 3.11 東日本大震災の写真が 50 点、石巻についての関係資料や文献が 100 点ほどである。最大収容人数は 50 人ほどである。営業時間は 10:00-18:00 である。本館 2 階にはバーが併設されており、地域のワークショップや地域住民の交流に使える公共スペースが存在している。営業時間は 10:00-23:00 である。

石巻ニューゼが建てられた目的は、復興に向かう石巻地域の姿を随時発信することで、震災の記憶の風化をさせないことや復興に向かう石巻地域の足並み

を一つにすることである。

石巻日日新聞社について

宮城県石巻市、東松島市、女川町をエリアとして「石巻日日新聞」を発行している新聞社のことである。部数は約 1 万 8 千部。社長の近江弘一氏を中心に石巻ニューゼの経営や市報の印刷など幅広く地域に働きかけている新聞社である。

2.2.2 地域の NIE についての考察

地域の NIE の位置付けとして、新聞研究 2009 年 3 月号の「NIE で向こう三軒両隣」[6]では、地域 NIE の効果について次のような事が述べられている。

NIE 活動の狙い

・新聞記事を資料に使って、こどもの目を社会に向けさせる
・学習を通して新聞を読める人を育てる
・新聞の役割や機能を理解してもらう

地域 NIE 活動の狙い

・地域力の再生
・異世代間交流のきっかけづくり
・地域貢献活動のきっかけ

また、地域 NIE としての課題点も見受けられる。次の 3 つが指摘されている。

地域 NIE 活動の課題

・人材確保
・時間確保
・継続性

地域に詳しく地域の NIE 活動をこどもたちに向けて行える人材の確保や、学校外で行われているために、活動自体の時間の確保や活動の継続性の問題があげ

られている。

2.3.学校内の NIE 活動と地域の NIE 活動について

2.1.と 2.2.において学校内の NIE 活動と地域の NIE 活動の実態について述べてきた。両者の違いは、活動に参加しているこどもたちの学習の情報収集の順番であると考えられる。学校内の NIE は活動の起点が新聞紙になっている場合が多い。よって、2.1 でも述べたように、評価や学習効果の調査から活動に参加しているこどもたちに新聞を閲読させるきっかけを促している傾向があると言える。

一方、地域の NIE 活動は地域の活動を体験しそこから、情報収集や発信の手段の 1 つとして新聞というものがある。そして、最終的な目的は新聞閲読や新聞作成ではなく地、域の人や物や事象を体験することである。

つまり､学校内 NIE は新聞を起点としてからそれぞれの活を行うのに対して、地域の NIE は体験を起点として新聞を含む様々な発信活動という点がその違いである。

2.4.仮説の構築

地域 NIE の課題点としてあげられている「人材確保」や「時間確保」や「継続性」の 3 点については、学校内で行われている NIE 活動にはあまり見受けられない課題である。「人材確保の問題」については、学校では、NIE 活動の指導は教員免許を持った教師が直接行っているためこのような問題は見受けられない。また、時間確保や継続性についても、同じことが言えるであろう。「時間の問題」も大きな問題ではない。また、「継続性」は 2 つの意味が考えられる。こどもの継続的な参加やこども同士のコミュニケーションが形成できる環境作りである。学校内における NIE 活動は、授業内で行われているため、参加やこども同士のコミュニケーション作りにおいて、大きな問題は存在しない。これまで述べたように、学校内の NIE は授業時間で行われている場合が多数である。しかし、地域の NIE 活動は 2.2.1 のような「石巻日日こども新聞」のワークップ活動の場合、毎週 1 回 2 時間という時間しかない。さらに、こどもたちの学校や学年は別々であり、コミュニケーションを取るにあたって、十分な素地があるわけではない。学校内の NIE 活動は、1 日の大半を共に過ごしているクラスメイトと指導教師の間で行われているため、当然の傾向といえる。さらに、

学校内 NIE は、対象のこどもたちがクラスメイトである場合が多く長期にわたる学習準備期間や教師の試行錯誤や努力により、いくらでも充実が図れる。

また、2.3 では手段と目的がそれぞれの NIE 活動において逆転していると述べたが、基本的な部分で共通している。それは NIE 活動の対象者がこどもである事と主催者は講師や教師である事、そして、活動のどこかで新聞というものが存在していることである。よって、これらの、活動時間の延長やコミュニケーションの充実や出席しやすい環境づくりを行う事で、少しでも学校内での NIE 活動におけるものに近づく事が出来さえすれば、ある程度の成果が期待できるのではないだろうか。

従って、本論文では、次の 2 点の課題を解決することで地域の NIE の促進を図れるという仮説を構築する。

・コミュニケーションの円滑化
・活動時間の延長

2.5 反転授業について

課題解決のために、本節では、NIE 活動を反転授業の特徴と照らし合わせた考察を行う。

反転授業とは

反転授業とは、学校教育における、授業と宿題の役割を反転させたもののことを言う。例えば、授業の予習の段階で時間外にデジタル教材により学び、教室で行われる授業では、予習で得た知識の確認や演習の学習を行う授業形態の事を示す。近年、この反転授業が広がりを見せており、要因は、オープン教材や ICT の普及である。反転授業の導入によって、学習時間の効率化を図り、学習の進度を早め、学習の効果を向上させることが期待されている。実際の導入例は付録 F に記述する。

反転授業効果

重田勝介は「反転授業　ICT による教育革新の進展」に反転授業の効果として、次のようにまとめらている[19]。

・生徒の学習時間を実質的に増加させること
・学んだ知識を使う機会を増やすこと

・学習の進度を早めること

これらの効果を地域の NIE に転用することが出来れば、2.4 で示した課題を解決することが見込まれる。次に、どうすれば転用できるのかを、反転授業と地域 NIE についての体系に注目し考察を行う。

反転授業と地域 NIE についての考察

反転授業の効果は、[19]や付録 F でも述べられているように、あらゆる授業で効果を発揮している。従って、授業の一環として行われている、学校内 NIE への導入においても効果が期待されるのではないだろうか。一方、体験ベースの地域の NIE においてはどうなのだろうか。そこで、本論文は、反転授業と地域 NIE の体系に注目してみた。それぞれの体系を簡易的に表すと下記のようになる。

反転授業

事前学習→演習→テスト

地域 NIE の体系

ワークショップの体験→記事制作

ここで、地域 NIE の体系の中に、ワークショップ体験の前に事前学習を入れると、非常に良く似た体系にならないだろうか。反転授業の事前学習は、教室で行う演習のために行っている。そして、その演習がテストへと繋がる。地域 NIE の体系も、ワークショップ体験のための事前学習を導入し、記事制作に備えるという手順を導入することで、反転授業の体系と極めて類似するのではないだろうか。

地域 NIE の新体系

事前学習→ワークショップの体験→記事制作

本論文は、この類似性に注目し、反転授業と同程度の効果がワークショップでの事前学習を行う事によって得られるのではないだろうかと想定した。また、反転授業は ICT を用いたデジタルでのアプローチを通して活動の促進を図って

いる。従って、本論文でも上記の反転授業の取組と同様の成果が期待できる、デジタルでのアプローチを行う。それは、地域の NIE における、学習ツールの開発である。次節において、学習ツールの仕様を述べる。

2.6 学習ツール

本論文では 2.4 の課題を解決するために、2.5 で紹介した反転授業での取り組みでの効果を根拠とし、WEB 上での学習ツールの構築を行った。デジタル技術の使用の理由は次の 2 点である。

・人間の行動に関わる時間の効率化に向いていること
・汎用性に期待できること

1 点目の理由として、2.5 や付録 F の事例でも述べられたように、デジタル技術は、インターネットを始めとする人材確保や情報の収集やコミュニケーションの時間の延長など、日常生活に便利さをもたらしてきた。それは、即ち、時間の効率化をもたらしてきたと言える。限られた活動の時間を増やすことは物理的に不可能である。従って、活動内の作業時間をデジタル技術によって、効率化を図る方向に指針を置いた。

2 点目の理由として、デジタル技術は汎用性に期待できるからである。特に WEB でのデジタル技術は再現性が高く、汎用できるからである。

従って、本論文では、特定の団体の NIE 活動にだけ特化した問題解決のための構築ではなく、デジタル技術により、汎用できる可能性を持たせた、学習ツールの開発を行う。次章では、デジタル技術を使用した、学習ツールの構築について述べる。また、2.3 での分析を踏まえ、新聞紙の使用を起点とすることに拘らずに、宮城県石巻市で行われている地域の NIE 活動をターゲットに考える。

---

[5] http://www.toyotafound.or.jp/
[6] http://www.furusatokigyo.net/

第 3 章

学　習　ツ　ー　ル

本章では、２章で建てた仮説を基づき学習ツールのプロトタイプの構築を行い、実際にこどもたちに操作をしてもらい、得られた評価を貰い、実装に備え改善を試みた。

3.1 問題解決事項と要求要件の考察

第２章で浮かび上がった、地域の NIE についての、「こどもたちのコミュニケーション」と「活動時間」の課題を以下の学習ツールを制作することによって改善を目指す。

こどもたちのコミュニケーションの課題について

はじめに、求められる学習ツールの概要について記述する。一つ目の課題である、「こどもたちのコミュニケーション」について、これらを充実させるためには、こどもたち同士のコミュニケーションの形成を肩代わりできるツールが必要である。具体的なコミュニケーションとは次の 2 点が考えられた。

1.会話などの直接的なコミュニケーション
2.共同作業を通したコミュニケーション

1 の直接的なコミュニケーションを実現するためには、WEB 上にある学習ツールに個人アカウントを作成し、メッセージ等のやり取りする機能を持った環境の構築が考えられる。

一方、2 の共同作業を通したコミュニケーションを実現するためには、WEB 上にある学習ツールに共同作業の出来る環境の構築が考えられる。ここで考えられる共同作業とは、例えば、記事の作成や修正、または、同じワークショップを体験したこどもたち同士での体験の報告である。

これらの実装を考えた時に、地域 NIE はこどもの体験を重視している。そして、トラブルが発生する可能性があるこどもたち同士のやり取りはリスクがあると考えられる。従って、2 のワークショップ開催者の目が行き届く、共

同作業を通したコミュニケーションの場所の構築を行うこととした。

これらを満たす学習ツールの機能を考えた。次の 2 点である。

1.テキストデータの投稿とそれらのデータを修正できる機能
2.HP 公開を前提とした記事公開が出来る機能

次にこれら機能の使い方と狙いを記述する。

1 は、こどもたちが記事や原稿としてテキストデータをコンピュータから学習ツールに書き込み、書き込んだテキストのデータを基に、それらの編集や修正を通してコミュニケーションを形成していく狙いがある。
2 は、1 で修正を行った記事や取材活動の後のこどもたちが WEB を通して活動を報告する。活動に参加できないこどもたちへの交流としての役割も兼ねている。

これら機能を搭載した学習ツールをプロトタイプ I と名付ける。

活動時間の課題について

二つ目の課題である、「活動時間の課題」について、これらを充実させるためには、活動時間を肩代わりできるツールが必要である。活動時間の課題解決には次の 2 点が考えられた。

1.活動時間を延長する
2.活動時間を効率化する

1 は、活動時間そのものの延長であるが、地域 NIE にとって、時間の延長は難しくある、不可能である
2 は活動時間の効率化である。活動の効率化に辺り、次の 2 点が考えられた。

1.ワークショップのテーマとなる事柄を事前に学習出来るツール
2.ワークショップの講師やスタッフなどと事前に交流を行うツール

1は、こどもたちが事前にワークショップの内容についての理解度を高めていく事によって、ワークショップの進行を円滑に進められる事とこどもたちの興味関心を引けるのではないか、と考えたものである。学習ツール案としては、WEB上に、ワークショップや取材活動に関するデータや写真や動画などを掲載する。そして、難解な漢字や難しい表現を使わずに、こどもたちにわかりやすくしたものが考えられる。これらの機能を搭載した学習ツールを「プロトタイプⅡ」と名付ける。

2は講師と交流を行う事によって、講師との仲は良くなるかもしれないが、必ずしもワークショップのテーマについての興味関心が向上するとは限らない。従って、構築は見送った。

3.2.学習ツールのプロトタイプの構築

3.2.1 学習ツールの仕様

学習ツールは基本的にはWEBページ上でWordPress[7]での実装を基本とした。理由は次の3点である。

・簡易性
・汎用性
・匿名性

WordPressは広く普及しておりWEB制作において、現状、最も操作や運用が簡易な技術の一つである。従って、今後の地域NIEにおける汎用を考え、石巻日日こども新聞のみに対応した複雑なアプリよりも、再現性が比較的高いWordPressでの実施を試みた。また、こどもが操作する観点から、匿名性の設定も必須条件となる。よって、WEB作成において、閲覧や編集のアクセス権限等の管理が容易であるのもWordPressの実施した理由の1つである。
図.3.1は開発した学習ツールのTOPページである。タイトルは「ISHINOMAKI KIDS」とした。プロトタイプ開発を行った学習ツールは2つである。記事の編集やワークショップの感想等を書き込める学習ツール、「プロトタイプⅠ」とこどもたちの体験を事前学習するための学習ツール、「プロトタイプⅡ」である。WEBの階層は図3.1のTOPページを最上として、その下層にTOPページから

リンクする形で、学習ツールが並列している。

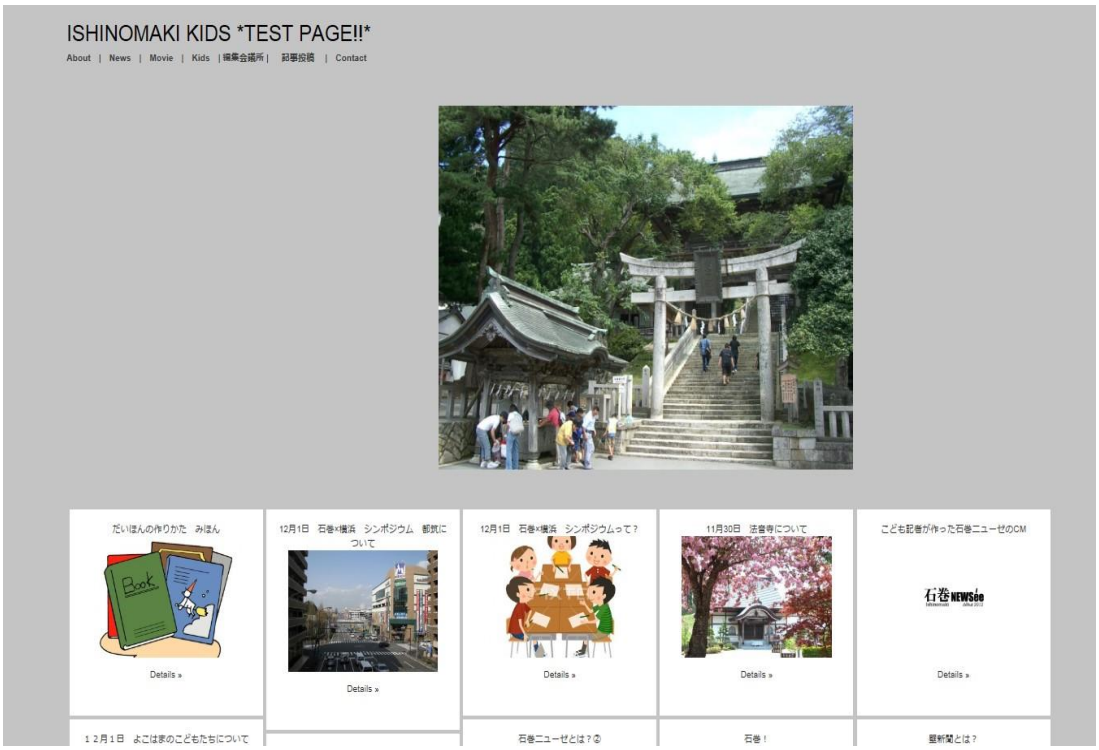


図 3.1 学習ツール:TOP ページ

3.2.2 プロトタイプⅠ：「編集会議所と記事投稿ページ」

図 3.2 のような掲示板の機能と図 3.3 のような WordPress の機能を合わせ開発した学習ツールである。

開発背景

石巻日日こども新聞の取材活動やワークショップでの感想や意見の書き込みを想定して開発した。石巻日日こども新聞は季刊で発行されており、毎号 10 回程度のワークショップを行い、新聞の制作を行っている。その性質上、活動の報告は年に 4 回の「石巻日日こども新聞」だけとなっており、日々の活動が地域に発信されているわけではない。また、活動は週一回のだけのため、欠席してしまったこどもたちのコミュニケーションが不足しているのではないかという想定もできる。従って、記事の作成や編集が出来るように掲示板機能を活用した WEB ページ(図 3.2)と活動の発信(図 3.3)が簡単に出来る投稿ページを作成した。

使い方と目的

使い方は、編集会議所(図 3.2)での活動の報告や記事の編集等を行う。また、編集会議所は編集前の記事や取材の報告、または、参加しているこどもたちのコミュニケーションの場としての使用が想定できる。よって、ワークショップ関係者のみが閲覧と書き込みが出来る、非公開ページとした。

また、記事投稿の機能は、集会議所で修正や編集を行った記事を全体に公開するためのものである。ここに投稿して公開されると、図 3.1 の TOP ページに掲載され、全ての人が閲覧可能となり、図 3.4 のように公開される。これらの機能は、こどもたちに新聞編集を気軽にどこへでも出来るようにすることと、限られたワークショップ時間外での実質的な活動の延長や頻度の向上をはかることが目的である。

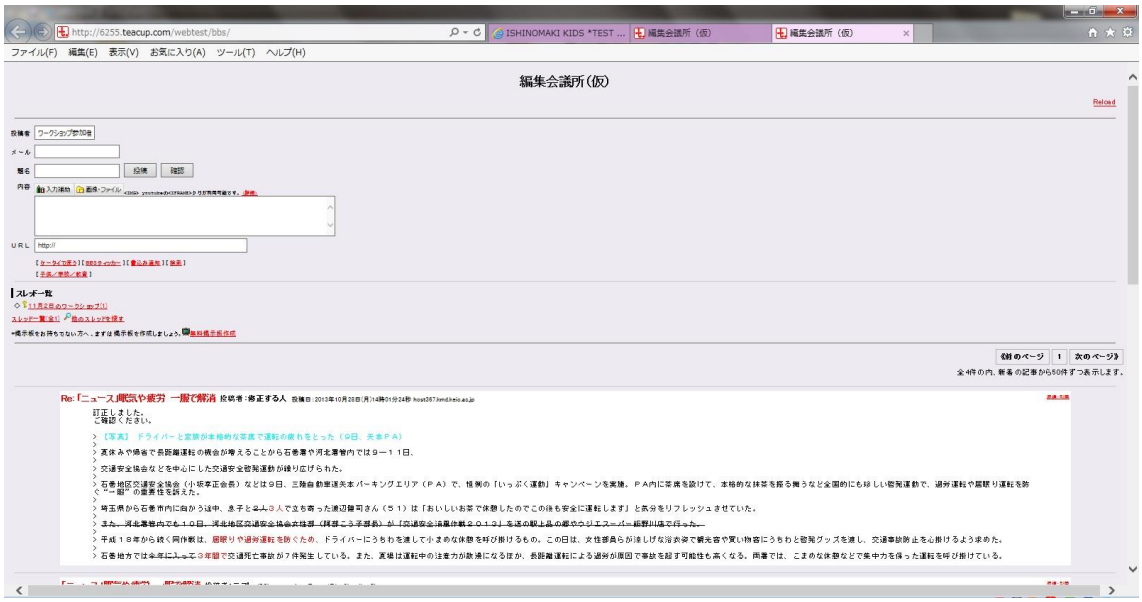


図 3.2 プロトタイプⅠ：編集会議所

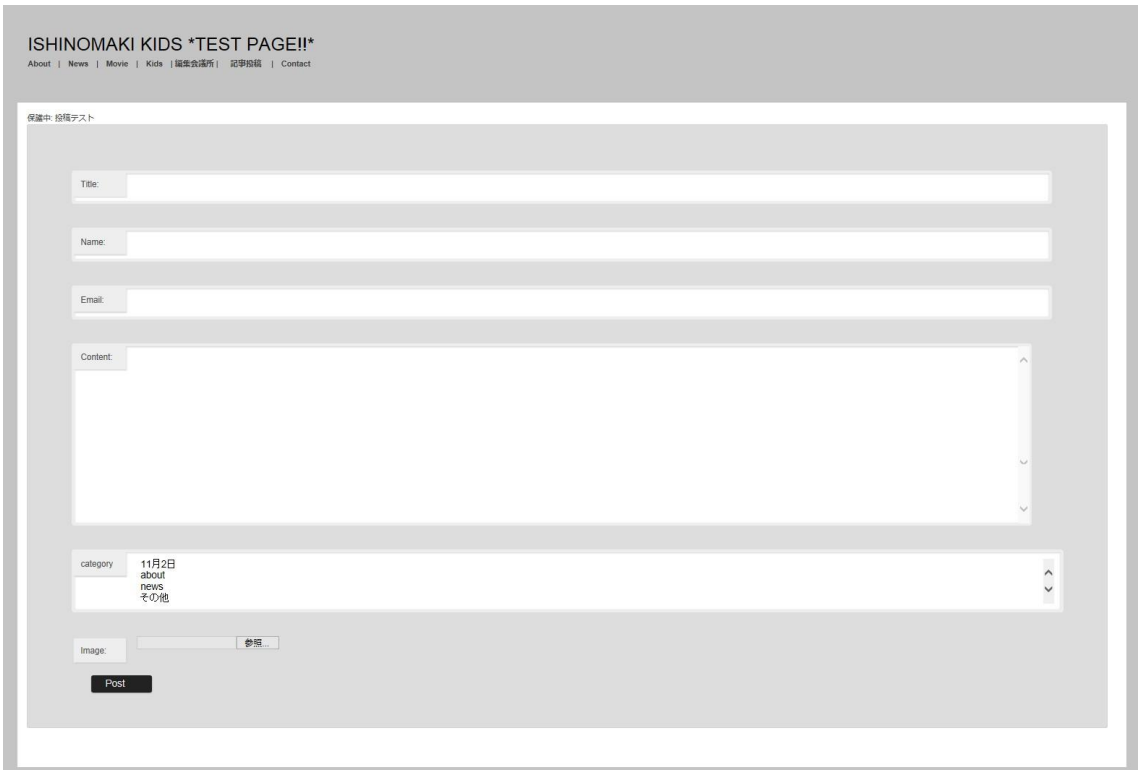


図 3.3 プロトタイプⅠ：記事投稿ページ

ISHINOMAKI KIDS *TEST PAGE!!*

About | News | Movie | Kids | 編集会議所 | 記事投稿 | Contact

「ニュース」眠気や疲労　一服で解消

【写真】 ドライバーと家族が本格的な茶席で運転の疲れをとった（９日、矢本ＰＡ）

夏休みや帰省で長距離運転の機会が増えることから石巻署や河北署管内では９―１１日、

交通安全協会などを中心にした交通安全啓発運動が繰り広げられた。

石巻地区交通安全協会（小坂享正会長）などは９日、三陸自動車道矢本パーキングエリア（ＰＡ）で、恒例の「いっぷく運動」キャンペーンを実施。ＰＡ内に茶席を設けて、本格的な抹茶を振る舞うなど全国的にも珍しい啓発運動で、過労運転や居眠り運転を防ぐ"一服"の重要性を訴えた。

埼玉県から石巻市内に向かう途中、息子と２人で立ち寄った渡辺健司さん（５１）は「おいしいお茶で休憩したのでこの後も安全に運転します」と気分をリフレッシュさせていた。

また、河北署管内でも１０日、河北地区交通安全協会女性部（阿部こう子部長）が「交通安全涼風作戦２０１３」を道の駅上品の郷やウジエスーパー飯野川店で行った。

平成１８年から続く同作戦は、居眠りや過労運転を防ぐため、ドライバーにうちわを渡して小まめな休憩を呼び掛けるもの。この日は、女性部員らが涼しげな浴衣姿で観光客や買い物客にうちわと啓発グッズを渡し、交通事故防止を心掛けるよう求めた。

石巻地方では今年に入って交通死亡事故が７件発生している。また、夏場は運転中の注意力が散漫になるほか、長距離運転による過労が原因で事故を起す可能性も高くなる。同署では、こまめな休憩などで集中力を保った運転を呼び掛けている。

図 3.4 プロトタイプⅠ：投稿された記事のサンプルページ

3.2.3 プロトタイプⅡ：「ワークショップ補助情報」

開発背景

限られた時間の中でこどもたちがワークショップでの体験を全て消化することは困難であるという想定を行い、事前学習行う学習ツール、プロトタイプⅡの開発を行った。想定したワークショップは、2013 年 11 月 19 日に開催される音楽体験のワークショップであった。音楽ワークショップの内容は、仙台の交響楽団のオーボエ演奏者が講師として招かれ、こどもたちにオーボエの演奏や身の回りの音について体験させ、その講師に取材を行うワークショップであった。従って、講師の情報と体験する楽器や音楽についての情報に関して掲載を行った。

使い方と目的

図 3.5 のページは全体公開されている図 3.1 の TOP ページにリンクが貼られている。内容は、上から講師の紹介、オーボエの写真、オーボエの情報、オーボエの音源、演奏動画となっており、使い方は、TOP ページからアクセスすると閲覧が可能となる。音源や動画は図 3.6.図 3.7 のように閲覧できる。ツールの特徴として、情報を詰め込み過ぎてないところにこだわった。今後の学習ツールの汎用性等を想定し、情報をわかりやすく絞ることを念頭に置き情報を精査した。この学習ツールの目的は前知識としてワークショップで体験する内容を知ってもらうことで、こどもたちの体験をより強くしてもらうことである。

図 3.5 プロトタイプⅡ：ワークショップ補助情報ページ

図 3.6 プロトタイプⅡ：音源再生

図 3.7 プロトタイプⅡ：動画再生

3.3.プロトタイプの評価

本節では、3.2.で制作した学習ツールのプロトタイプの評価をワークショップに先立って行った。小学生５，６年生３名にコンピュータを通して、プロトタイプの操作してもらった。

プロトタイプⅠ：編集会議所と記事投稿のツールへの声(3.2.2)

構築したプロトタイプⅠ(3.2)をワークショップ参加者の小学６年生の３名のこどもに操作をしてもらい評価を貰った。記事の書き込みや投稿の操作は行えた。しかし、キーボードの操作は得意という訳ではないように見受けられ、実際に限られたワークショップの時間内に学習ツールとして使う事は必ずしも適切ではないことが観測された。

プロトタイプⅡ:ワークショップの補助情報のツールへの声(3.2.3)

特に、ページ内の「身の回りにおける珍しい音や動画」への関心が強かった。こどもたち自ら操作することは余りなく、一緒に操作を行うことで、強い興味を示した。一方で、楽器の紹介文などの文字だけの情報についてはあまり興味を示してなかった。字が小さいという評価もあった。

開催されているワークショップの観察

学習ツールの評価を行った日にワークショップも開催されていた。石巻日日こども新聞の記事を講師と共に、こどもたち２人が作成する内容であった。こどもたちのモチベーションは新聞記事を書きに来ているというよりは、友達と会える事や色々な人と話に来ているといった気持ちの人が多いと感じられた。集団で学び集団で体験することなどに興味や関心が高いことが観察できた。

3.4 プロトタイプから得られた改善点

本節では、最初に 3.3.でのプロトタイプの評価を基に、学習ツールの改善すべき点をそれぞれまとめると以下のようになる。

プロトタイプⅠ
・入力操作
プロトタイプⅡ
・操作性の簡略化

この評価に対し本論文は以下の対応を行った

・プロトタイプⅠの実装の見送り
・プロトタイプⅡをベースに講師と小学生がワークショップで使用ができる学習ツールの開発
→「ツールⅠ」の開発

・プロトタイプⅡを簡略化し、事前学習のための学習ツールの開発
→「ツールⅡ」の開発

以下に、これらの対応を行った理由を述べる

3.3 の評価よりプロトタイプⅠの改善点は入力操作である。3.3.の調査により、小学生に向けた PC の短時間での複雑な操作は困難であることが明確となり、改善の必要がある。プロトタイプⅡは、こどもたちが動画や音楽についての掲載に強い反応を見せた。しかし、自ら操作することは少なく、操作性の改善が必要である。プロトタイプⅠの改善において、こどもたちの入力操作の上達以外には方法が見つからず、実装は難しいという結論に達した。従って、入力操作がないプロトタイプⅡをベースに改善を行っていく。

また、3.3 のプロトタイプⅡの評価から、学習ツールの共同操作を行うことによって興味を示すこどもが見受けられた。従って、ワークショップ内において、講師が小学生と共に理解度に応じて適材適所に一緒に使用できる学習ツールの開発も行う事とした。

3.5 実施検討

次章では、改善を行った学習ツールをワークショップで使用し、実証を行う。本節は、次章の実験の説明と開発を行う学習ツールの簡易的な説明を述べる。3.4 の改善点を踏まえそれぞれのツールの実験を行う。

ツールⅠ

・プロトタイプⅡをベースに講師と小学生がワークショップ内で使用ができる学習ツール

実施の概要：

実験Ⅰでは、プロトタイプⅡをベースに講師と小学生がワークショップ内で使用ができる学習ツール「ツールⅠ」の開発を行い、ワークショップでの有用性を実証する。

ツールⅡ

・プロトタイプⅡを簡略化した学習ツール

実施の概要：

プロトタイプⅡを簡略化した学習ツール「ツールⅡ」の開発を行い、ワークショップでの有用性を実証する。ワークショップの事前学習を行うための学習ツールである。

---

[7] http://ja.wordpress.org/

第 4 章

実　施　内　容

本章では、制作した学習ツールの説明とワークショップでの実装を述べる。

4.1.ツールの概要

本章で制作した学習ツールは、プロトタイプⅡを踏襲したものである。学習ツールは、ツールⅠとツールⅡの開発を行った。以下、本節では、それぞれのツールの概要を述べる。

WEB 上におけるツール階層（サイトマップ）

ツールⅠ、ツールⅡはプロトタイプⅡと同じく、3.2.1 で作成した WEB ページ(TOP ページ)より（図 3.1）リンクされている。ツールⅠとツールⅡは共に、TOP ページの下の階層に存在する。

基本仕様

コンピュータからインターネットに接続し、3.2.1 で作成した WEB ページからツールにリンクする。アクセス権限等もプロトタイプⅡを踏襲しており、誰でもアクセスできる仕様となっている。

ツールの役割

ツールⅠ：

ツールⅠは、ワークショップとの連動を目的としたワークショップの活動の中での実施を行う学習ツールである。操作は、ワークショップの講師とこどもたちが一緒に行う。

ツールⅡ：

ツールⅡは、事前学習を目的としたワークショップの活動前での実施を行う学習ツールである。操作は、こどもたちのみで行う。

4.1.1 ツールⅠについて

本項では、ツールⅠの概要を述べる。

概要：

ツールⅠは、ワークショップの講師とこどもたちがワークショップの活動の中で一緒に操作し、ワークショップの理解を深めるための学習ツールである。

ツールⅠを実施するワークショップについて：

ワークショップの内容は、地域の博物館である、石巻ニューゼの CM をこどもたちと講師が協力し作成するものである。

ツールⅠの主な改善点と特徴：

・操作の簡略化

・ページの簡略化

詳細：

3.5 や 4.1 でも述べたように、ツールⅠは第 3 章で開発したプロトタイプⅡをベースに開発・改善を行ったものである。改善内容は、操作の簡略化とページの簡略化である。操作の簡略化としては、クリックできるリンクを大幅に削減し、本当に大切な情報のみを残した。また、こどもたちだけを対象とせずにワークショップ講師に向けた開発も念頭に置いた。従って、ページの作りとしては､図 4.3 における画像をクリックしたときに壁新聞の号が変わる等の簡単な操作や、文字数をできるだけ少なくし、複数のこどもたちが操作・閲覧できるものとした。また、壁新聞や台本作りの見本など、ワークショップでの CM 作りが円滑に進むような情報を掲載した。ツールⅠでの掲載情報を下記にまとめる。

掲載情報:

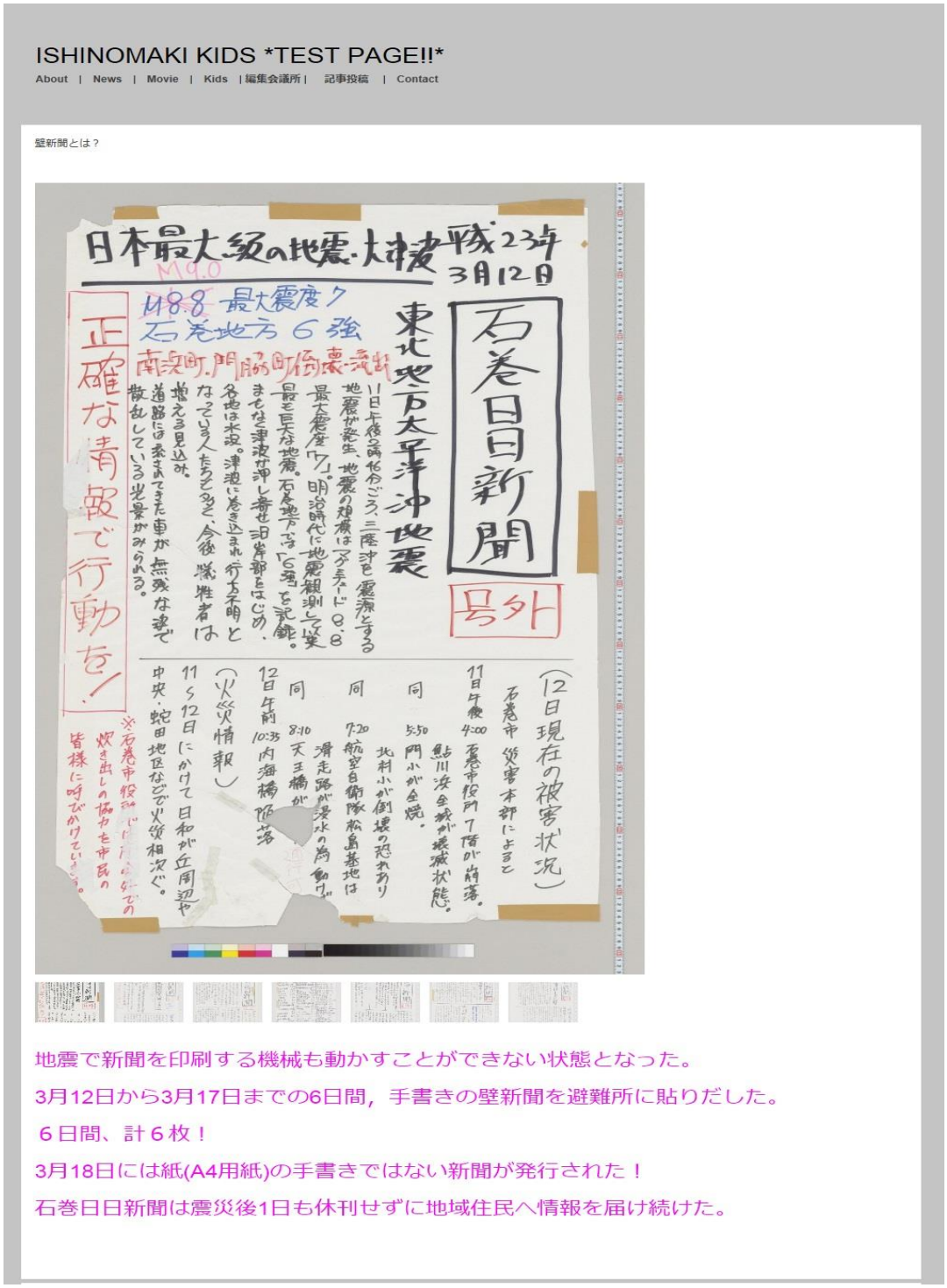
・学習テーマについて（図 4.2 石巻ニューゼについて）

・石巻ニューゼの展示物についての情報（図 4.3 壁新聞について）

・台本の見本

・ワークショップのタイムテーブル

図 4. 1:ツールⅠ：石巻ニューゼのページ



地震で新聞を印刷する機械も動かすことができない状態となった。

3月12日から3月17日までの6日間，手書きの壁新聞を避難所に貼りだした。

６日間、計６枚！

3月18日には紙(A4用紙)の手書きではない新聞が発行された！

石巻日日新聞は震災後1日も休刊せずに地域住民へ情報を届け続けた。

図 4.2:ツールⅠ:壁新聞のページ

4.1.2 ツールⅡについて

本項では、ツールⅡの概要を述べる。

概要：

ツールⅡは、こどもたちがワークショップの事前学習を行うための学習ツールである。

ツールⅡを実施するワークショップについて：

ワークショップの内容は、宮城県石巻市のお寺の取材と、神奈川県横浜市のこどもたちとのシンポジウムである。

ツールⅡの主な改善点と特徴：

・スクロール中心の操作
・完結性
・文字数の削減と写真中心のページ構成

ツールⅠと基本的な使い方は同じであるが、ツールⅡはワークショップに向けて、事前に学習するための学習ツールである。3.5 でも述べたように第 3 章のプロトタイプⅡに基づいてツールⅡの開発を行った。11 月 30 日のワークショップは野外でのワークショップとなるので、図 4.4 のように外観等が想像できやすくするために、写真を中心に掲載した。また、図 4.5 のように少しでも多くの相手の事を把握し、シンポジウムを円滑に進められるように、つづきジュニア編集局が発行している新聞や動画等を掲載した。ツールⅡの掲載情報を下記にまとめる。

掲載情報：

・取材先について（図 4.4 法音寺のページ）
・シンポジウムのこどもたちについて（図 4.5 つづきジュニア編集局のページ）
・学習テーマについて（シンポジウムのノウハウ等）
・それぞれのこどもたちについて（横浜と石巻についての概要）

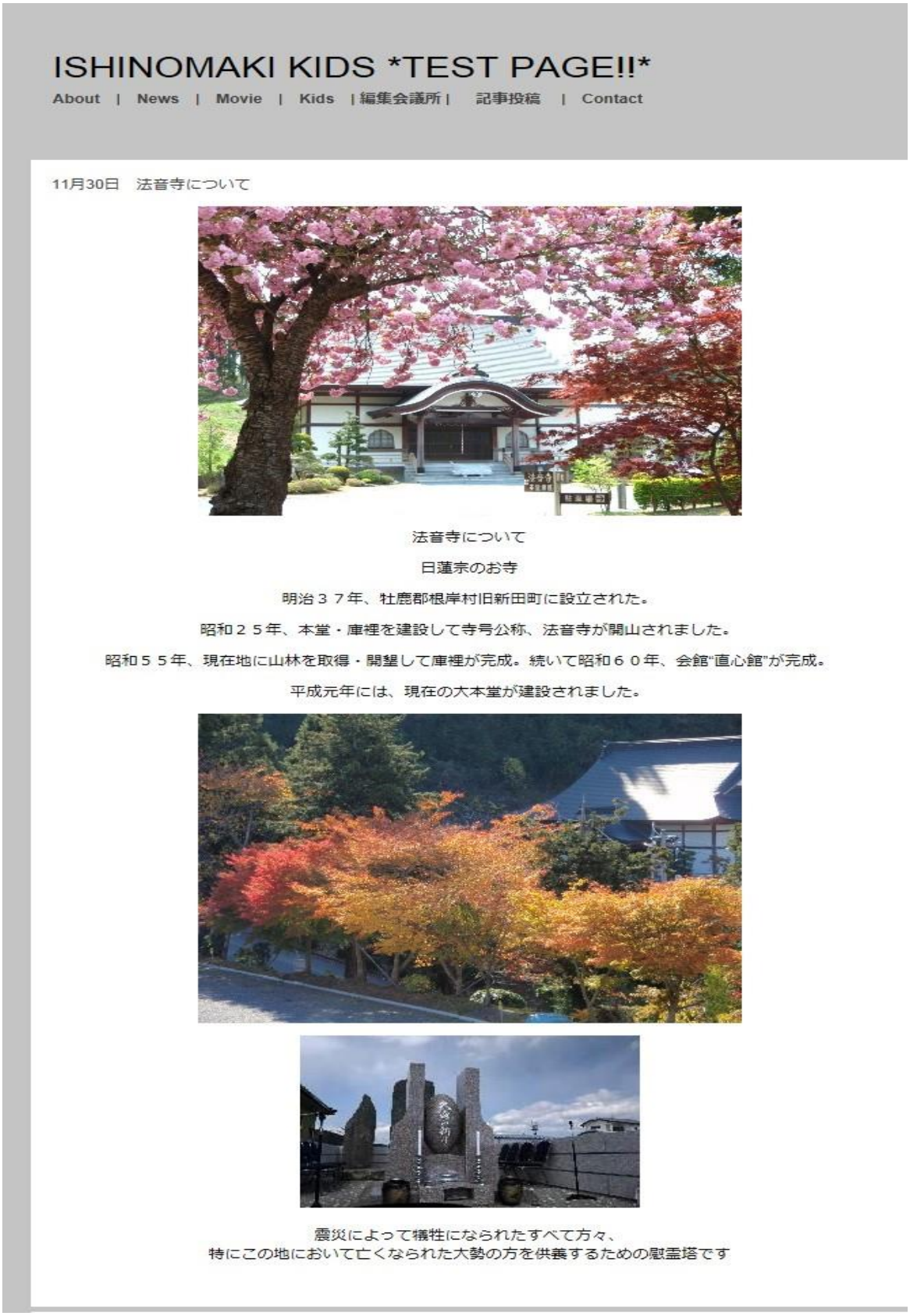


図 4.3:ツールⅡ:法音寺のページ

図 4.4 ツールⅡ：つづきジュニア編集局のページ

4.2.ツールＩの実験

ツールＩの実験として、私たち、KMD 側が主催となりキッズメディアステーションの協力の基、石巻ニューゼを紹介する数十秒程度の CM 作りワークショップを実地した（付録 A)。本節では、その実験について述べる。

4.2.1 実験の目的

ツールＩの実験では、実際に、ワークショップでツールＩの実装を行い、有用性を図る事が目的である。

4.2.2 ワークショップの概要と実験方法

概要:

ワークショップはこどもの参加者９名、ワークショップの進行は大人５名で執り行われた。内容は、石巻ニューゼの CM を作るワークショップである。全３部構成であり、第１部として石巻ニューゼについての説明を開催側が行った。第２部として。講師１人に３名のこどもが付き、3 チームに分かれ、こどもたちが中心となり、展示物の鑑賞、CM の台本作りを行った。第３部として、CM の撮影と鑑賞を執り行った。計３本の CM が完成した。

参加者の目的設定：

参加者の目的は地域への情報発信を行っている石巻ニューゼの取組みを、CM 作りを通して、こどもたちに体験してもらう事である。

ツールＩの位置付けと実験方法：

ツールＩは、ツールの有用性を比較するため、ワークショップの３チームの内の１チームが使用する。使用のタイミングはワークショップの第二部の石巻ニューゼの展示物の見学や台本作成の時である。ツールＩは、講師が独自の判断でこどもたちに言葉で説明しにくいところや、進行が止まってしまったとき等に使用する。ツールＩの調査として、ワークショップ終了後に講師とこどもたちにそれぞれインタビューを行った。次項では、ワークショップの詳細な経過を述べる。ツールＩの実験の結果は次章で述べる。

4.2.3 ワークショップの詳細

本項では、ツールⅠ(4.1.1)の実験においてのワークショップの詳細な内容と経過を述べる。

詳細:

ワークショップはこどもの参加者:9名(小学1年生2名、小学4年生3名 小学6年生3名、高校生1名）大人（スタッフ）5名、大学院生3名、キッズメディアステーション社員2名で、11月16日の13:00から15:00までの2時間で執り行った。会場は宮城県石巻市にある、石巻ニューゼで開催した。ワークショップは全3部構成で取りまとめ進行した。第1部では、石巻ニューゼの説明を行った。第2部では、石巻ニューゼの中で展示物を鑑賞し、CMにしたいことを調べ、台本の作成を行った。第3部では、撮影を終えたCMをみんなで鑑賞した。以下、それぞれにおいての目的と狙いを部別に述べる。

第1部

内容

始まる前に、ツールⅠの紹介を行った。付録Aのワークショップの進行表を見せながら、本日のスケジュールについての説明を行った。第1部では、講師の一人が、CMの役割と石巻ニューゼについてのプレゼンテーションを参加したこどもたち9人に約20分間に渡り行った。CMを作る事の意味や地域における石巻ニューゼの役割の話など、石巻ニューゼの取組に対して、石巻のこどもたちにとって、覚えていてほしい話をした。

狙い

ツールⅠの役割とワークショップの内容について、こどもたちに理解してもらうパートである。石巻ニューゼのCMを作ることを通して、地域についての理解を深める事が狙いである。従って、テレビCMを事例として話し、CMの役割や大事なポイントの話、そして石巻ニューゼの名前の由来、創設者、地域にとっての役割を説明した。ツールⅠにも同様の内容を記載した(図4.2,図4.3)。

会場の様子

図 4.1 のような、長机を囲む形でこどもたち 9 人が座って行った。
机の角側の 1 方向にスクリーンとプロジェクターを用意し説明を行った。ツール I の導入されたコンピュータもこの机の上に設置した。

第 2 部

内容

第 2 部では、初めに 3 チームに分かれた。チームの分け方は、学年が隔たらないように工夫した。講師（大学院生）一人にこどもたち 3 名が付き、A チーム、B チーム、C チームに分かれた。CM を作るため、講師とこどもたちは一緒に石巻ニューゼの展示物を見て回った。各チーム、石巻ニューゼを見て回り、それぞれの判断で、何を CM とするかを話し合い、台本作成までを 40 分で行った。各チーム、CM 作成の時間や手法は一切限定せずに行った。A チームは壁新聞についての CM、B チームは壁新聞と石巻の歴史年表についての CM、C チームは石巻ニューゼの全体の紹介の CM をそれぞれ制作した。B チームがツール I の使用を行った。講師の役割はこどもたちの石巻ニューゼへの理解を助ける事である。B チームはツール I を台本作成や壁新聞の説明をするときに使用した。読めない漢字や難解な事象への説明の役割を担った。

狙い

展示物やニューゼスタッフに話を聞いて、石巻ニューゼについて調べて、石巻ニューゼの役割や存在意義等を体感してもらう事が狙いである。

会場の様子

1 階の展示スペース 2 階の飲食スペースなどを自由にチームごとに徘徊して見て回った。B チームは学習ツールの使用しこどもたちとの話のきっかけを作っていたようだ。

第 3 部

内容

第 2 部で話し合ったことに基づいて、台本や撮影場所を決め、撮影を行った。

最後にCMをスクリーンで映し、みんなで鑑賞をした。台本作成はこどもの自主性を持たせようと試みた。しかし、時間の関係上、講師自らが作成する部分も度々あった。Bチームはツール I を使用し、台本や撮影の際に利用していた。撮影では、こどもたちは緊張せずに元気よく撮影している姿が見受けられた。その後、CMの鑑賞を行った。

狙い

狙いは、こどもたちが石巻ニューゼを実際に見て思った事を、CM作りを通して、言葉に出してもらう事で記憶を深めもらう事。そして、出来上がったCMを鑑賞することで、達成感を味わってもらい、ワークショップに、もう一度参加したいという気持ちを残すことである。また、ツール I には台本の見本を掲載しワークショップに役立てるために準備した。

会場の様子

第2部と同じ形で撮影を行った。CMの鑑賞は第1部と同じスクリーンとプロジェクターで行った。

図 4.5:ワークショップ会場の様子

4.3 ツールⅡの実験

ツールⅡ(4.1.2)の実験として、キッズメディアステーションの協力の基、キッズメディアステーション主催のワークショップ(付録 B)での実施を行った。本節では、その実験について述べる。

4.3.1 実験の目的

ツールⅡの実験では、実際に、ワークショップ前にツールⅡの実施を行い、有用性を図る事が目的である。

4.3.2 ワークショップの概要と実験方法

概要：

ワークショップはキッズメディアステーションの主催により、11 月 30 日と 12 月 1 日の 2 日間にわたり、石巻のこどもたちと横浜のこども(つづきジュニア編集局)たちで行われた。参加メンバーは石巻のこどもたちは 10 名(高校生 1 人、中学 2 年生 1 人、小学 6 年生 3 人、小学 5 年生 3 人、小学 1 年生 2 人)である。横浜のこどもたちは 6 名(中学 2 年生 1 名、小学 6 年生 5 名)である。

つづきジュニア編集局とは

NPO 法人ミニシティヨコハマプラスが運営しているこども新聞「つづきジュニアタイムス」を発行している編集局である。神奈川県横浜市の都筑区の街作りについての新聞づくりを通したワークショップ活動を行っている。

ツールⅡの位置付けと実験方法：

ツールⅡは、ワークショップ前にワークショップについての事前学習を行い、ワークショップの充実を図るものである。使用のタイミングはワークショップ開始前である。従って、ツールⅡはワークショップの開始前に石巻のこどもたちに操作してもらった。ツールⅡの調査として、ワークショップ終了後に石巻のこどもたちにインタビューを行った。次項では、ワークショップの経過を述べる。ツールⅡの実験の結果は次章で述べる。

4.3.3 ワークショップの詳細

詳細：

最初に、ツールⅡの実験として、ワークショップの事前学習を、ツールⅡを使用し、こどもたちに行った(図 4.6)。対象は石巻の小学５、６年生こどもたち全員であり、操作後にインタビュー調査を行った。

１日目の 11 月 30 日は、石巻のお寺の取材のワークショップが行われた。宮城県石巻市の法寺というお寺で､13:00-15:00 の 2 時間にわたり開催された。最初 30 分は皆でお寺の外観などを見て回った。次にお寺の本堂に入り 30 分程度住職の話を聞いた。内容は、3.11 東日本大震災の発生当時に避難場所となっていた法音寺の話であった。次に、こどもたちが住職にお寺の事や震災当時の事などの質問を 15 分間行い、その日のワークショップは終了した。

２日目の 12 月 1 日は、石巻のこどもたちと横浜のつづきジュニア編集局のこどもたちたちとのシンポジウムが 13:00-15:00 の 2 時間に渡り石巻ニューゼで行われた。テーマはこども目線で街づくりを考え、お互いに意見を交わすといった内容となった。

図 4.6 ツールⅡの操作をするこどもたち

第 5 章

実　験　結　果　と　考　察

本章ではツールⅠとツールⅡの実験結果と考察を述べる。

5.1.ツールⅠの実験の結果

本節では、ツールⅠの実験から得られたワークショップの講師と参加したこどもたちからのインタビュー内容を述べる。

5.1.1 講師からのインタビュー

講師を担当した 2 人からそれぞれのワークショップとツールⅠについての意見や見解を記載する。

講師①:
辻　慎太郎

所属:慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科修士 2 年
環境:ワークショップ内で学習ツールを使用した。
ワークショップの感想と学習ツールについての見解

総括：
「ワークショップ自体は上手くいったと思います。準備段階で心配していた困ったことは、どのくらいの学年の小学生がどれくらいの人数集まるのかがわからず機材等の準備を多めにしておきました。あと、2 時間という限られた時間しかなく、時間的には余裕はほとんどなかったのが印象的でした。学習ツールは第 2 部の台本作りにかなり役に立ったと個人的には思っております。」

第 1 部：
「順番に振り返って行くと、ワークショップの第 1 部の石巻ニューゼについての説明部分は、井村君が最初口頭での説明を行う予定だったけど、急遽、学

習ツールに簡単な資料を掲載しこどもたちにプレゼンテーションを行いましたね。WEB 上に作った学習ツールをスクリーンに映し出しました。話だけでは聞いてくれないかなと思い、スクリーンに映し出すことで少しでも理解してもらえたらなと考えての行動だったのかな。全てのこどもたちの参加者にわかるように丁寧に説明はしていたけど、ぼくの近くにいた小学 1 年生の男の子はあまり話を聞いてくれてはいなかったね。他のこどもたちは聞いていてくれたふうに思います。」

第 2 部：

「ワークショップの第二部はチームに分かれ、実際に石巻ニューゼの展示物を見て回り、どんな CM にするのかをチームのこどもたちと一緒に考えました。石巻ニューゼの展示物は特別に小さいこどもたちにも分かるように工夫されて展示等がなされているわけではないので、学習ツールには、展示物の一つである壁新聞の簡単な説明を記載してありました。他にも石巻ニューゼの創設者の話や石巻日日新聞の話や CM やカメラの使い方等を掲載してありました。実際に学習ツールを使ったのは壁新聞の説明ですね。てっきり、壁新聞については、普段、石巻ニューゼにワークショップで通っている人達であり、さらに石巻のこども達なら授業か何かでやっていて、知っているものだと思い込んでいましたが、そんなことはなかったですね。まぁ、よくよく考えてみると、自分の生まれ育った地域について考えてみると、合点がいきました。私自身も地元についてはあまり知りませんでしたしね。はじめ、口頭で壁新聞について話していたのですが、ほとんど初対面ということもあってか、なかなか話しを理解しているようには見えませんでした。ここでも説明の補足に学習ツールの準備をして言って良かったと思いました。そして、台本作りに入って、壁新聞についての紹介をしてもらいました。時間的にすべてをこども達が考えた台本の作成は難しく、私が半分以上考える形となってしまいました。この辺をもう少し学習ツール等でリカバリー出来れば良かったかなと思います。しかし、楽しそうにやっているこどもたちの姿を見て一安心しました。」

第 3 部:

「そして、台本が出来ると第三部の撮影へ移行しました。カメラの操作は男の子だからなのか、簡単にカメラを扱っていました。機材操作で不安を一部感じていましたが杞憂で終わり良かったと思います。無事撮影が終わり鑑賞を行おうと思ったのですが、軽いトラブルが発生しました。カメラからの動画の読

み込みに時間がかかってしまいました。大幅な進行の遅れはなかったものの終了時間は過ぎてしまいました。」

講師②:

高松　佑太

所属:慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科修士１年

環境:ワークショップ内での学習ツールの使用は行っていない。

インタビュー内容

総括

「良い活動だと思いました。石巻や女川町に、それも、こどもが集まる場所を継続し作っていくことはとても意味のあることだと思いますし、今回その一端に参加させて頂いて本当に良い経験となりました。ワークショップについてですが、全体的には上手くいったと思います。ただ、如何せん、準備不足なところが少なからずビデオカメラ等の備品などの取り違えや編集の時のトラブルなどに出ていたとおもいました。」

第１部

「最初は、井村さんの石巻ニューゼのプレゼンテーションから始まりました。僕はここでは、いむらさんの話をこどもたちと一緒に聞いていただけです。個人的には問題なくすすめられていて、こどもたちも真剣に話を聞いていた子が多かった風に思います」

第２部

「第２部になりまして、僕はここが一番苦戦しました。こどもたちと一緒に石巻ニューゼの展示物をぐるぐる見て回るのはとても楽しかったです。　あと、展示されて写真等をみて被災したこどもから直接震災の時の事を聞くのは、なんだかとてもつらかったですがとても貴重な経験になりました。けど、やはりというべきか、ぼくの力不足というべきか、こどもたちの自主性をあまりだしてあげられませんでした。こどもたちとのコミュニケーションというか距離感がなかなかつかみづらかったです。ここで、学習ツールやテンプレや見本などがあれば、少なくとも子供たちの関心を一点に集中させることは出来たのかなと思いました。展示物の閲覧時間が終わり、台本作りに進んでいったのですが、ここでも、やはりこどもの自主性を十分には引き出せなかったと思います。この段階ではみんなと仲良くなれ距離感もわかってきたのですが、進んで台本を

作るということはなかったですね。その点、僕のチームには１人高校生がいまして、その子が小学校６年生のこどもをリードしてくれて何とかかんとかという感じでした。」

第３部

「次に撮影に入りました。石巻日日新聞社のスタッフの人にも協力して頂き、撮影の方は滞りなく終われたと思います。けど、次の鑑賞までの間のビデオカメラの映像をパソコンに取だしスクリーンに映し出すまでに手間取ってしまいました。高画質で撮りすぎたためか意外に映像の処理が重く時間がかかってしまいました。それ以外は全チームちゃんとできていましたし、こどもたちも皆嬉しそうに取り組んでいましたので良かったです。」

5.1.2 こどもたちからのインタビュー

ツールＩの実験を行った CM 作りワークショップの終了後に、こどもたちにインタビューを行った。(一部抜粋)

①ツールＩについての声

Q1.ツールで見た情報はわかりやすかったですか？

・わかりやすかった

・壁新聞についてよくわかった

・台本作りが難しかったので見本を見て、良かったです

Q2.使い方はわかりましたか？

・さいしょ、とまどった

・マウスがほしかったです

・わかったけど、字が小さい

Q3.他に見たい情報はありましたか？

・ビデオカメラの操作の仕方

・石巻ニューゼ全部の情報

・もっと動きがほしかったです

Q4.どういう時に役立てましたか？

・台本作り

・壁新聞についてわからなかったから見た

Q5.今後どういう時にこのツールを使いたいですか？

・取材の時
・CM の編集をしたい
・休んだ時に家で使いたい

Q6.この学習ツールの良いところを教えて下さい

・わかりやすかった
・ニューゼについてよくわかった
・壁新聞について知らないことが載っていた

Q7.この学習ツールの悪いところを教えて下さい

・色が暗い
・クリックする場所がわからなかった
・昔に作った新聞も見たかった

②ワークショップについての声

Q1.CM 作りを通して、ニューゼについて新しく知ったことはありますか

・はい。だいたいは知っていたけれど、すごく細かいところまで知れました。
・上の階のとこ、ニューゼの言葉の意味
・かべ新聞が 7 枚あること
・ニュースの博物館だった！！記者魂ってすごい！！

Q2.あらためて、ニューゼを見てどうでしたか？

・とても良かったです
・すごいと思った
・よい取組だった
・石巻の歴史から文化発信共に楽しめる。

Q3.CM 作りで石巻の人にニューゼの何を伝えたいと思いましたか？

・あきらめない事の大切さ
・地元のみんなのためにあきらめず情報発信しつづけたこと。
・地震が来てもがんばろうということを伝えたい

Q4.今度、また、石巻の CM を作るとしたら何を CM としたいですか

・今回は、かべ新聞や写真をしたので、歴史をしたいです
・日和キツテン
・石巻ガガ CM　＊ガガはお母さんの意味
・隣の食べ物屋さん

Q5.CM 作りは楽しかったですか？どういうところに興味がわきました？

・壁新聞の内容

・楽しかったです

・もっと CM っぽくするにはどうすればいいのか、もっと考えたかった

・面白かったです

Q6.今後やってみたいワークショップがあればお聞かせ下さい。

・陶芸

・演劇

・アニメーション

・名産品作り

5.2.ツールⅡの実験結果

本節では、ツールⅡの操作を行ったこどもたちからのインタビュー内容を述べる。

Q.1 内容はわかりやすかったですか

つづきのこどもたちのことがよくわかった。お寺の歴史がわかりやすかった。

Q.2 この学習ツールの操作はわかりますか？

少しわかる、わからない、わからない

Q.3 この学習ツールの内容はワークショップに役立ちそうですか？またどういうところが役立ちそうですか？

横浜のこどもたちについて少しわかった

毎週のこどもたちの様子がわかると良い、休んでしまった時に使いたい

Q.4 学習ツール等でワークショップの内容について振り返ることはどう思いますか？

見たい時に見られて良い、ワークショップをやりっぱなしにならないから良いと思う、記事を書くのに役立ちそう

Q.5　ワークショップ等でパソコンやタブレットを使うとしたら、どういう場面で使ってみたいですか？

記事を書きたい、保存できる絵が描けると楽しいかも、番組編集、取材中

Q.7 こども新聞にデジタル要素を入れるとしたらどんなことをしてみたいですか？

外国人や外国文化との交流、記事をクリックする記事を書いた人の声が流れる、文字が動くなどアニメーションを取り入れる、パッと見て子供っぽい新聞だが生身は大人が作っている新聞、わかりやすくて面白い新聞

Q.8 この学習ツールでどのようなことが出来ればいいと思いますか？

ワークショップの内容、スケジュール、他地域の情報をのせて国内の考え方の違いを体験したい、他地域のこども新聞活動、面白い新聞広告

5.3.結果からの考察

ツールⅠの実験

講師のインタビューからの考察

ツールⅠを使用してもらった辻氏からは、こどもたちに展示物の説明や台本作りの説明を行う時に役に立ったと答えている。また、ツールⅠを使用しなかった高松氏からは、学習ツールの必要性が見受けられる場面が多々あったと答えている。高松氏からは、こどもとのコミュニケーションを取るきっかけが、上手に掴めなかった、あらゆる場面で、学習ツール等の話のきっかけが作れる存在があれば違ったかもしれないと答えている。当初の狙いであった講師とこども両方に向けたワークショップの理解を補助ツールの効果と新たにこどもたちと講師のコミュニケーションの起点としての効果が観測された。

こどもたちのインタビューからの考察

ツールⅠを使ってもらったこどもたちの評価は役に立ったと答えてくれている。特に、壁新聞の情報が印象に残っているこどもが多かった。学習ツールの操作は講師とこどもが一緒になって操作する形を取ったため、操作性の不満はあまり出ていない。また、ワークショップ自体の感想は多くの人が楽しいと言ってくれた。そして、石巻ニューゼについて多くの人が少なからずワークショップ内容について理解してくれたことが観察された。

ツールⅡの実験

こどもたちのインタビューからの考察

写真や動画を増やし、操作も簡単にしたが、操作が分からない、という答えも見受けられる。このことから、やはり、こどもたちだけでの単独の操作は難しいことが考察できる。しかし、これは、学習ツールの問題というよりも、こどもたちの慣れの問題かもしれない。こどもたちにとっては、他人のコンピュータを使い、初めて触る学習ツールである。もし、この学習ツールを毎週のワークショップで利用できる環境や統一された仕様やインターフェ

イスが整っていれば、問題ではなかったとも考えられる。また、ツールⅡの操作を通じて、石巻地域の活動に興味を持っているこどもたちから、外国との交流をしてみたいという声があった。NIE 活動は日本だけではなく 50 各国以上で行われており、学習ツールを用いる事が出来れば、海外の新聞活動と連携していくのも十分可能ではある。結果として様々な意見が出たように見えるが、一貫して、操作性に対する事であった。限られた時間の中で、如何に学習ツールに慣れ親しんでいけばいいのかが今後の課題である。

総括

ツールⅠは、ワークショップ内のコミュニケーションの起点としての効果とワークショップ内の補助的ツールとしての効果が観測された。ツールⅡは、事前学習に理解を示す声も挙げられたが、一方で学習ツールの操作に対する難しさが見受けられた。今後、さらに品質の向上とこどもたちに操作を慣れ親しむくらいの導入を行えば、操作性の問題は解決するだろう。しかし、注意しなければいけないのは、デジタルありきでワークショップを構築してはいけないことである。なぜなら、開発や構築に時間を有してしまい汎用性に欠けてしまうからである。従って誰もが学習ツールと構築と操作ができ活動の幅を広げるものを目指すべきである。

5.4 本論文の全体を通した考察

本節では、これまでの実験結果を振り返り、本論文がどの程度 NIE の促進を図れたか、研究としてどの程度の成果が得られたかを考察する。

5.3 では、石巻の地域 NIE 活動において、学習ツールを構築することによって課題解決を試みた。当初、プロトタイプの構築段階ではこどもたちにコンピュータの入力操作によって、学習ツールの展開を試みようとしていた。１つ目の理由としては、第 2 章、第 3 章で述べたようにコミュニケーションの課題を解決するためである。もう一つの理由としては、本来の新聞記事はコンピュータ等の入力操作によって、書かれている場合が多いからだ。それは、石巻日日こども新聞も例外ではなく、最終的な記事作成はキッズメディアステーションの社員が行っている。本論文では、コンピュータによる入力操作は小学校の高学年のこどもならば、それほどの影響はない事だと想定していたが、思いのほか違っていた。結局、入力操作における解決策は見つからず実装は見送る事とな

ってしまった。しかし、今後のデジタルを通した NIE 活動を考えるならば、この問題を解決することは必須である。本論文では、問題解決とは至らなかったが、問題の解決の糸口として、次の 2 点においての可能性を記述する。

1.こどもたち同士による相互学習制度
2.こどもたちによる自主的な WEB での活動

例えば、こどもたちによる相互学習制度である。例えば、デジタルスキルを持ち合わせているこどもたちが、知らないこどもたちに教えるという制度である。地域 NIE 活動の場合、活動しているこどもたちの年齢は一定ではない。従って、コンピュータ操作に秀でた中学生や高校生から、活動を通して学び取ることが可能である。そして、その役割を WEB 上の学習ツールが担えば良いのではないだろうか。第三章のプロトタイプでの構築を試みた、ワークショップの活動報告や記事が投稿できる場所などである。さらに、WEB 上での活動が活発化すれば、コンピュータ操作に慣れ親しんでいない小学生も成長と共に、デジタルスキルを身に着け、教える側にも回る事が出来る。この循環の構築こそが、デジタルツールを使った NIE 活動において、必須となってくることが本論文を通して明らかとなったと言えるだろう。

また、これらは、デジタルツールを必須としない NIE 活動においても必要な要素である。なぜならば、学校内 NIE と地域 NIE は、非常にノウハウが蓄積しにくい活動となってしまっている。例えば、学校内の NIE の場合、現状ではクラスの担任の教師の判断で、活動を行っており、学校内の先生の全員の参加は出来ていない。教師の質や経験で毎回 NIE 活動の品質が変わり、その学校から NIE に精通した教師が転任等でいなくなった場合、ノウハウは無くなってしまう。NIE 活動の経験から得られ、保存しておくべきであるノウハウ等が蓄積できない環境は非常にもったいなくあり、今後の NIE 活動の縮小の引き金となるかもしれない。従って、何らかの形でノウハウを蓄積できる環境が早急に必要であるのは間違えない。

本論文としては、ノウハウが蓄積できる段階まで、学習ツールの構築を行いたかったが、小学生のこどもたちのデジタルスキルの想定が出来ず、そこまでの実装は出来なかった。しかし、本論文の学習ツールは 5.3 でも述べたように、地域においての NIE 活動での効果を示めすことができた。本論文の成果として、

少なくとも今後のデジタルでの地域 NIE の課題解決においてのデジタルツールでのアプローチの素地と、上記で述べたようなツールが NIE 活動において必要であることを明確にできたのではないだろうか。

第 6 章

結　論

本章では､今後の地域における NIE 活動の展望と今後あるべき NIE についての考察を結論として述べる。

6.1.地域と NIE の今後について

5.4 では、これからの NIE についての考察を述べた。本節では、これからの NIE は具体的にどうあるべきなのかを本論文の結論として述べる。

現状では、学校内で行われている NIE 活動が全国各地で活発に広がっているとは考えにくい。2.4.でも述べたが、学校内の NIE の実質的な目標は新聞を読めるこどもを育てる事､地域の NIE 活動の実質的な目標は地域を学ぶ事である。

しかし、今後は、地域 NIE と学校内 NIE の相互的な活動を行い、お互いを高め合うことが必要ではないかと考察した｡例えば､学校が地域の NIE に対して、時間や場所の確保のために、学校が使っていない教室や機材を提供することや、学校が授業の一環として、地域の NIE を行っている団体等の活動に参加することなどである。このような、相互的な関係が実施できて、初めて NIE 活動が次のステップへと繋がるのではないだろうか。実際に、そうような動きも見受けられる。本論文の研究パートナーである、キッズメディアステーションが発行している「石巻日日こども新聞」が愛知県愛西市西山端小学校等の NIE 活動において使用され、学校から付録 C.D.のような感想文や激励文が送られてきている。これは、地域の NIE 活動が学校内に逆輸入され、さらにその活動が再び輸入されたことを示しており、相互学習が徐々にではあるが実現されているといえるだろう。

6.2.NIE における学習ツールの今後について

本論文で制作した学習ツール（ツールⅠ、ツールⅡ）は、講師とこどもたちのコミュニケーションの効果、ワークショップでの補助的ツールとしての効果をそれぞれ残した。また、それらのノウハウが蓄積できる学習ツールが必要であることを 5.4 で述べた。しかし、これら学習ツールの汎用を考えた時、実際の NIE 活動、特に学校内における NIE 活動に導入するのは、大変難しいことであ

る。学習ツールが導入できる可能性としては、本論文のアプローチのように、地域の NIE 活動の中で実装を行い、実績を積み上げ汎用していくしかないだろう。6.1 でものべたように学校内 NIE 活動と地域の NIE との相互学習を行う関係が築かれつつある。このような関係をさらに強化し、学校内のこどもたちが、地域の NIE 活動に参加し、学校内で実装しづらい学習ツールを利用してもらえれば、学習ツールの効果やノウハウが蓄積できていくだろう。

また、NIE 活動においてこのような考え方もできる。特に地域における NIE は震災と共に広がりを見せた。一方で、震災が風化してしまうと活動の縮小の可能性があるとも言える。例えば、石巻日日こども新聞はサポーターや財団等の寄付金、援助金で支えられている。後に、活動の継続にあたり、過去の実績等が問われる可能性が十分に考えられる。そこで、学校が地域に協力を行う事が出来れば、予算などの財政的な心配も緩和される可能性があり、非常に良好な関係が築けるかもしれない。従って、今後の NIE 活動の発展の第一段階として、ノウハウや実績を残せる学習ツールが起点となれば、より良い NIE の実現が可能になると本論文は提言する。

6.3 学校教育における情報リテラシー

5.4 でも述べたとおり、こどもたちによる PC の入力操作は、今後の NIE 活動において必要な条件として浮上してくる可能性が高い。従って、本節では、学校教育における、情報リテラシーの観点からの考察を述べる。2.5 で反転授業について述べたが反転授業の広がりは、インターネット回線の広がりとこどもたちのデジタルスキルの向上だと考えられている。学校教育では、どのような情報リテラシーにおける教育が行われているのかを述べる。「教育の情報化に関する手引」[20]は、2013 年より、全国の小学校で実地されている、学習指導要領の情報教育部分の領域に絞った手引きで、各教科の情報教育の実施の仕方等が掲載されている。小学校の学習指導要領には、情報教育に向けた「総則」として次の事が述べられている。

> 各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報を身に着け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器

などの教材・教具の適切な活用を図ること。

上記の記述の解説として、次の事が述べられている。

○基本的な操作：キーボードなどによる文字の入力、電子ファイルの保存・整理、インターネットの閲覧、電子メールの送信など

○情報手段を適切に活用できるようにするための学習活動：文章の編集・図表の作成、様々な方法での情報の収集・調査・比較、情報手段を継肩交流、調べたもののまとめ・発表などの学習活動

○情報モラルを身に付けるための活動：情報発信による他人や社会への影響、ネットワーク上のルールやマナーを守ることの意味、情報には自他の権利があること、情報には誤ったものや危険なものがあること、健康を害するような行動などについて考えさせる学習活動

これらは、小学校における学習指導要領の情報教育に関する記述である。こどもたちに、コンピュータの基本的な操作、基本的なソフトウェアの操作、各教科の学習において ICT 利用が可能なレベルのデジタルスキルを身に付けさせようという学習指導要領と読み取ることが出来る。具体的な、授業における、コンピュータの使用は小学校４年生から導入すべきことが記されている。しかし、実態としては、コンピュータ操作に長けた、こどもが育ってはいないのではないかということを次の２点から考えることが出来る。

・コンピュータの台数
・コンピュータの使用時間

「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」[21]において、教育用のコンピュータ１台当たりの児童生徒数は 6.5 人、という調査結果が掲載されている。これは、全国の平均であり、都道府県別に見てみると、1 位の鹿児島が 4.5 人、最下位の埼玉県は 8.2 人と開きがあり、学校別にみるとさらに開きがみられるであろう。

また、こどものコンピュータの使用時間において、いくつか課題があると考察できる。多くの学校において、コンピュータは授業のための道具であり、学校の授業時間の範囲内の使用しかできないと推察される。従って、現行の状況では全てのこどもたちが、コンピュータに慣れ親しめる環境ではない事が言える。

つまり、現在の小学生のコンピュータのスキルは、家庭でどれくらいコンピュータを操作しているのかに比例してしまうのではないだろうか。実際に、本論文で協力して頂いた、キッズメディアステーションのワークショップに通う、宮城県石巻市の小学生を見ても、コンピュータのスキルには開きが見られた。

現状において、コンピュータのスキルを小学生に身に付けさせるためには、良き学習指導要領の作成でも、コンピュータに長けた教員の育成でもなく、図書館の本のように、学校内でいつでも使えるコンピュータが存在できる環境を構築する事であると本論文は提言する。

謝　辞

本論文の指導教員であり、幅広い知見から的確な指導と暖かい励ましやご指摘をしていただきました慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の岸博幸教授に心から感謝いたします。

研究の方向性について様々な助言や指導をいただきました慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の加藤朗教授、古川享教授に心から感謝いたします。

研究活動の基盤となる調査や、プロジェクトに対する意見や実験やワークショップのご協力を頂いた太田倫子様や近江弘一様を始めとした一般社団法人キッズメディアステーション、石巻日日新聞社の皆様方に心より感謝いたします。

また、同研究室で様々な面で協力して頂きました、辻慎太郎君、高松佑太君、内田啓太君、東平知沙さんに心より感謝いたします。

参　考　文　献

[1] 博物館・NIE 委員会（2010)『2009 年度「NIE 効果測定調査」結果報告』,日本新聞教育文化財団

[2] 石川 實(2012)『新聞教育ルネサンス』,白順出版

[3] 石川 實(2010)『新聞教育の文化誌』,白順出版

[4] 影山 清四郎(2006) 『学びを開く NIE』,春風社

[5] 柳澤 伸司（2009）『新聞教育の原点』,世界思想社

[6] 渡辺 裕子（2009）「NIE の向こう三軒両隣」『新聞研究』No.692 pp.80-84.日本新聞協会

[7] 八浪 英明（2011）「大震災の中で考える新聞活用」『新聞研究』No.718 pp.14-17.日本新聞協会

[8] 藤田 和之（2011）「楽しく読んで、学力を」『新聞研究』No.718 pp.18-21.日本新聞協会

[9] 小林 伸雄（2011）「教育の転換点を好機として」『新聞研究』No.718 pp.22-25.日本新聞協会

[10] 普久原 均（2011）「読者、学校の高いニーズを実感」『新聞研究』No.718 pp.26-29.日本新聞協会

[11] 鈴木 光（2011）「日本初の子供向けスポーツ紙」『新聞研究』No.718 pp.30-32.日本新聞協会

[12] 橋本 祥夫（2011）「新聞活用と学習効果」『新聞研究』No.718 pp.33-35.日本新聞協会

[13] 高木 まさき（2011）「他者との関係性を回復する場に」『新聞研究』No.718 pp.36-39.日本新聞協会

[14] 北村 敏廣（2013）「NIE のすそ野を広げるために」『新聞研究』No.746

pp.52-55.日本新聞協会
[15] 高木 まさき（2013）「新聞で育まれる言葉の力」『新聞研究』No.746 pp.56-60.日本新聞協会
[16] 小川 三和子（2013）「学校図書館と NIE」『新聞研究』No.746 pp.62-63. 日本新聞協会
[17] 藤竹 暁（2012)『図説 日本のメディア』,NHK 出版
[18] 市川 正孝（2013)『「新聞教育」を創る』,学文社
[19] 重田 勝介(2012)「反転授業 ICT による教育改革の進展」『情報管理』vol.56 pp.677-689
[20]文部科学省(2010) 「教育の情報化に関する手引」
[21]文部科学省(2013).「平成 24 年度学校における教育の情報化の実態に関する調査」

付　録

A. ワークショップ進行表等

11 月 16 日　番組作りワークショップ

～ワークショップの内容兼タイムテーブル＜案＞～

石巻ニューゼ紹介番組

＜準備物＞

- プロジェクターでの説明用　　PC１台
- PC・またはタブレット　３台程度
- A4 用紙　台本作成用
- ビデオカメラ２台
- 写真のカメラ 1－2 台
- プロジェクターとスクリーン
- たこ足線

＜全三部構成＞。

- **１部１０分-２０分　石巻ニューゼについての説明**
- **２部４０分-５０分　石巻ニューゼの紹介したいことを考えたり調べたりする**
- **３部４０分-５０分　番組撮影・鑑賞**

＜ワークショップ内容兼タイムテーブル＞

0.スケジュール・諸注意等のアナウンス(10 分)

1 部.石巻ニューゼについての説明　(10 分-20 分)

ニューゼの説明、プロジェクターまたは、資料を用いて、石巻ニューゼについて簡単に説明します。アイスブレイクの意味も込め、こどもたちとの対話形式で行います。こどもたちとコミュニケーションを取ることが狙いです。

1.1 説明内容について

小学生に向けたスライド３枚程度を予定。

- ニューゼの名前の由来
- 創始者の紹介
- ニューゼの役割

2 部.みんなで視聴者に石巻ニューゼの紹介したいことを考えたり調べたりする。
（全 40-50 分）

グループに分かれます。人数によって調整し１グループ３名―４名程度を想定しています。＜例＞　井村グループ、辻グループ

2.1 ニューゼを調べる

グループ別で自由にニューゼの１階展示スペースを巡る。大人がこどもたちの展示物の理解を助ける（言葉の意味や読み方等）。ニューゼのスタッフ等にインタビューが可能ならこどもたちがニューゼについて聞きたいことをインタビューします。

2.1.1WEB ツールについて(http://dcp2013.sakura.ne.jp/wordpress/)

こどもたちが自由に WEB ツールにも触れるように PC を設置しておきます。こどもたちの理解しにくいところや言葉では説明しにくいところをサポートします。1 での説明内容や、石巻ニューゼの展示物に関連する情報を掲載します。

2.2 番組で紹介する展示物等を決める。

各グループ内で話し合い、番組で紹介する展示物を決定します。

2.3 台本作成

紹介する展示物が決まったら、台本作成に移ります。

基本的にこどもたちによる自由な番組作成を考えていますが、念のため番組構成のテンプレもあらかじめ用意しておきます。

2.3.1<例>制作番組の構成のテンプレ

- こどもたちの自己紹介
- ニューゼとは？
- 紹介するものについての説明
- 私の考え　実体験を通した、見てほしい事　伝えたい事、などを話す。
- メッセージなど（大人たちに言いたい事、日日新聞に言いたい事など）。

3 部.番組撮影・鑑賞　（全 40-50 分）

3.1　本番

グループ別に撮影を行います。撮影場所等は各グループで自由に決め、こどもたち一人一度は出演することを原則とします。大人のサポートを受けながら、カメラ等もこどもたちが中心となって撮影を行います。各グループ：ビデオカメラ１台　カメラ１－２台を使用します。

3.2 鑑賞(１０分)

みんなで、出来上がった映像をスクリーン等で鑑賞します。映像の切り貼り程度の編集を出来れば行います。時間等の都合で押してしまった場合は、編集を行わず撮影に成功した映像を順番に流します。

B. 12 月 1 日　シンポジウムチラシ

こどもだからできるまちづくりってなんだろう？
きっと何かができるはず！

参加無料

石巻 × 横浜
こども記者シンポジウム

2013年 12月1日(日) 13時～15時

終了後 16 時まで交流会も行います

未来のまちをつくっていくのは、１０年後大人になる、今のこどもたちではないでしょうか。
こどもたちが今、お互いのまちについて思っていることって、どんなことなのでしょうか？

こどもたちだからできる
まちづくりってなんだろう？

横浜のジュニア記者は、横浜が過去の震災、空襲などを経て復興してきたまちづくりについて、取材をしながら学んだことを発表します。

今回のこども記者シンポジウムでは、石巻日日こども新聞の記者と一緒に、まちや人の取材活動を通して、お互いのまちについて思うことなどについてトークし、交流を深めます。

2013 年 3 月、石巻日日こども新聞の記者が横浜のこどものまち「ミニヨコハマシティ」を訪れて、「ジュニア放送局」のイベントを行い、交流がはじまりました。今回は、横浜のジュニア記者が、石巻で取材をし、記者同士でのシンポジウムを行うことになりました。

出演パネリスト

石巻日日こども新聞記者

千葉拓人（ちば ひろと）（宮城県東松島高校 3 年）
木村ひな子（きむら ひなこ）（石巻市立門脇中学校 2 年）
松林拓希（まつばやしひろき）（石巻市立蛇田小学校 6 年）
村松鈴音（むらまつりんね）（石巻市立大街道小学校 6 年）
八重樫 蓮（やえがしれん）（石巻市立住吉小学校 6 年）　他

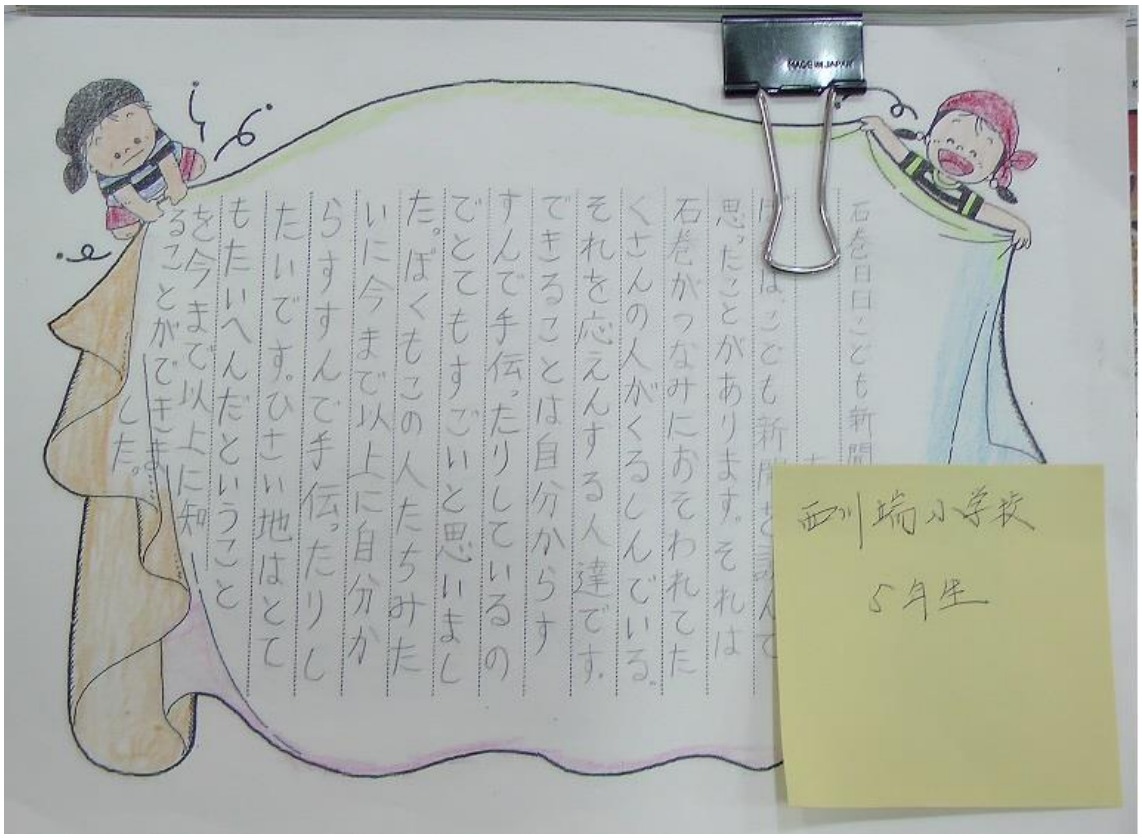
つづきジュニア編集局

百崎佑（ももざきゆう）（横浜市立中川西中学校 2 年）
直枝遼茉（なおえりょうま）（横浜市立荏田南小学校 6 年）
濱中千広（はまなかちひろ）（横浜市立中川小学校 6 年）
綱島桜香（つなしまさらか）（横浜市立荏田南小学校 6 年）
渡邊怜奈（わたなべれいな）（横浜市立茅ヶ崎東小学校 6 年）
小八重咲空（こばえ さら）（横浜市立川和東小学校 6 年）
竹内海羽（たけうちみう）（横浜市立荏田小学校 6 年）
倉田まどか（くらたまどか）（横浜市立都筑小学校 6 年）
実籾茉優（みもみまゆ）（横浜市立南山田小学校 6 年）

主催　NPO 法人ミニシティ・プラス　&　一般社団法人キッズ・メディア・ステーション
後援　石巻日日新聞社　　石巻市教育委員会
＊この事業は 2013 年度ドコモ市民活動団体への助成をいただいて、実施しています。

シンポジウムに関するお問い合わせはこちら
横浜：NPO 法人ミニシティ・プラス　045-306-9004　e-mail ：minicityplus@gmail.com
石巻：石巻ニューゼ　0225-98-7323

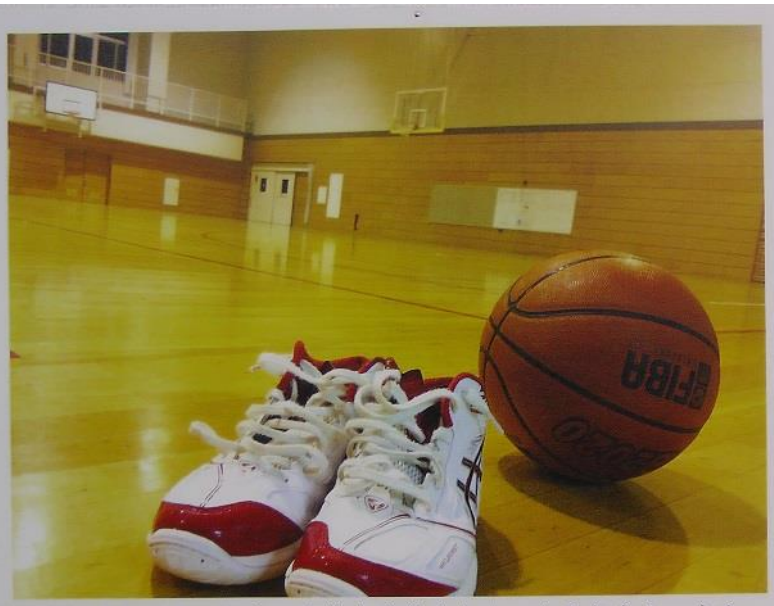
C.石巻日日こども新聞を読んだ感想Ⅰ



D.石巻日日こども新聞を読んだ感想Ⅱ

あたりまえの風景

立命館慶祥中　小林　梨乃



私はこのバスケットボールからたくさんのことを学んだ。

初めて同級生だけでチームになって戦った一年生大会。負けてばかりの試合だった。私は、他のチームとの差を感じたし、それ以上にチームプレイの難しさを知った。

それから、毎日毎日がむしゃらに練習をしては失敗したりあきらめたりした。何度も、何度も、ミーティングを開くこともあった。それでも、毎日毎日みんなとバスケをした。最後の試合は悔しい結果だったけど、私を成長させた二年だった。

たくさんのことを教えてくれたバスケットボールという競技。

私にとってはあたりまえの風景。

そんな「いつでも」や「あたりまえ」の風景。失う怖さを知る前に大切にしておきたいと思う。

E.石巻日日こども新聞の関連報道

2013年（平成25年）11月22日（金曜日）

石巻日日こども新聞の感想文を書いた児童たち―愛西市西川端小で

復興の夢 読んで感動

愛西・西川端小児童 「石巻こども新聞」の感想文

愛西市西川端小学校の児童たちが、東日本大震災で被災した宮城県石巻市の小中学生、高校生らが取材して作る「石巻日日こども新聞」を読んで感想文を書いた。被災にめげず前向きにまちづくりの夢を描こうとする姿勢に接し、感動した思いをつづった。（藤嶋崇）

愛西市の日永貴章市長が十月、石巻日日こども新聞に義援金を届けた義兄の三浦衛さん（五五）＝横浜市＝から九月号を受け取ったのがきっかけ。

市教委を通じて、この新聞の存在を知った西川端小の小林正樹校長（五五）が「震災を風化させてはいけない」と児童に読ませることにした。

九月号には、児童が考えた地域の未来像や支援活動を続ける著名人などが取り上げられている。小林校長が五、六年生の担任に紙面を手渡し、児童たちが感想文を書くことになった。

「つらいこともあったはずなのに明るく、前を向いていられることがすごい」「あらためて、震災で苦しんだ人がたくさんいるんだなと感じました。震災を忘れないようにしたいです」

児童九十六人の感想文には、同年代の子どもたちに共感したり、震災を見つめ直したりする言葉が並んでいる。

六年の山田朋果さん（一一）は「未来のことを考える意志を…っていることが印象的だ…た」、佐合銀音さん（一一）は「…災地には暗いイメージがあっ…けど、みんなが協力して盛り…そうとすることが伝わって…た」と話していた。

小林校長は「新聞を読んで…分も前向きに生きていこうと…う感想がいくつもあったのが…れしかった」と話している。

感想文は、新聞を作った宮…の子どもたちに送る予定だ。

石巻日日こども新聞　被災した子どもたちの表現の場をつくろ…と、仙台市内の一般社団法人が東日本大震災から1年後の201…年3月11日に創刊した。宮城県石巻市の小中高生らが取材し、地…の石巻日日新聞社の新聞紙や輪転機を使って制作している。3…6、9、12月の季刊発行で、毎号カラー4ページ。発行部数は4万部…石巻市内の子どもや国内外の賛同者たちに届けられている。

F.反転授業の導入例

反転授業の導入例

反転授業の論文「反転授業 ICT による教育革新の進展」[19]には、反転授業を実際に行った学校での事例が紹介されている。

一例目として、2013 年度 4 月に近畿大学附属高等学校で、1048 名による英語と数学の授業での反転授業が導入の模様が記されている。英語の授業では、事前学習として、語彙の習得と音読活動を教師が作成したビデオと教材を使って行い、教室では、復習としてのテストや学習した語彙を使用した共同学習などが行われていた。一方、数学の授業では、英語と同様、事前に教師が作成したビデオと教材を使い学習し、教室ではその知識を使った問題演習中心に授業を行っている。成果としては、これまで 1 年かけて学習してきた内容を半年で終了することが出来た。また、空きが出来た時間にグループ学習を取り入れることによって、教師と生徒とかかわる時間が増加したとの報告も述べられている。

二例目として 2012 年度に宮城県の富谷町立東向陽台小学校で実地された算数での取り組みを紹介する。事前学習として、こどもたちにタブレット端末を家庭に持ち帰らせ、教師が作ったビデオと教材を学習させ、ノートを作らせた。そして、教室ではそのノートに浮かび上がってきた分かったこと分からなかったことを明確化させ、その内容を中心とした演習を行った。成果としては、こどもたちの学習時間の平均が 1.5 倍となったことがあげられている。